

特116

991

福永勝盛著

新撰國文典

全

大阪時習書院



始



特116

991

福永勝盛著

新撰國文典 全

大阪 時習書院

特16
975

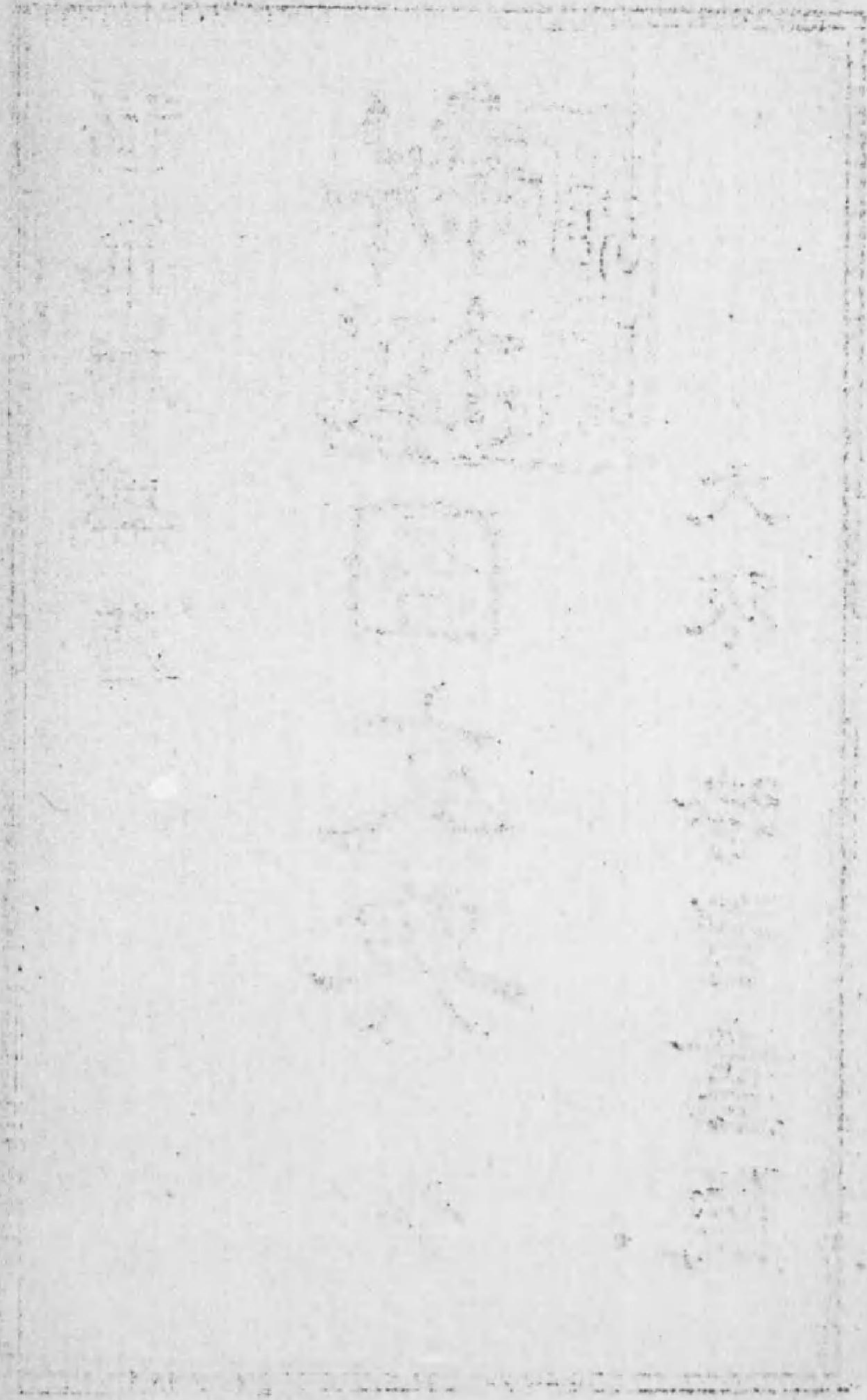
福永勝盛著

新撰國文典



大阪 時習書院

全
13. 4. 5
内交



新撰國文典 目次

第一編 品詞論(上)

第一章	總說	一
第二章	名詞	八
第三章	代名詞	一〇
第四章	動詞	一三
第五章	形容詞	三五
第六章	副詞	四一
第七章	助動詞	四四
第八章	接續詞	四六
第九章	助詞	四八

目次

一

第十章 感動詞……………五〇

第二編 品詞論(下)

第一章 音 便……………五五

第二章 動詞の時と時の助動詞……………五九

第三章 動詞の法と法の助動詞……………六八

第四章 動詞の相と相の助動詞……………八三

第五章 尊敬及び謙遜の助動詞……………八九

第六章 推量及び打消の助動詞……………九四

第七章 指定・詠歎・比況の助動詞……………九九

第八章 第一類の助詞の用法……………一〇四

第九章 第二類の助詞の用法……………一一〇

第十章 第三類の助詞の用法……………一一六

第三編 文章論

第一章 文の成分……………一二九

第二章 文の成分の位置と省略……………一三五

第三章 節と文の構造上の種類……………一三八

第四章 文の性質上の種類……………一四三

附 録 (一) 正誤問題集……………一四八

(二) 文法上許容ニ關スル事項……………一五四

表 動詞の活用表

動詞の活用と行との關係表

形容詞の活用表

文語の助動詞の活用表

口語の助動詞の活用表

動詞と助詞の接續法

新撰國文典 目次終

新撰國文典

福永勝盛著

第一編 品詞論(上)

第一章 總說

人の口から出る音がその人の懐いてゐる何等かの意味を表す時は、その音を言語又は單に語といふ。

木君倒る。志忝し。

言語は右の如く一音又は一音以上から成立つものである。その言語が次の如く二つ以上集つて一つの纏つた思想を表すものを文章又は單に文といふ。

言語
文章

文法

また一國の最多數の人が使ふ言語文章をその國の國語又は國文といひ、その國語上の一定の法則を文法といふ。隨て文法はその國語を正しく語り、正しく書き、又能く理解するに甚だ必要なものである。

主語と述語

總て文章には少くとも、右の**木君の志**等の如くその文の題目となるもの即ち**主語**と、**倒る・忝し**等の如くその題目を説明するもの即ち**述語**との二要素がなくてはならぬ。次の文では**雨・僕の本**が主語で、**降るまじ・美しい**が述語である。

雨は降るまじ。(文語)

僕の本が美しい。(口語)

木が倒る。 君の志は忝し。

單語 觀念語 形式語

い音になつてしまふ。その中では**まじの**が獨立して完全な意味を持つてゐるのではないが、**はは雨**に附いてそれと他の物とを區別する意味、**まじは降る**に附いてそれを心の中で打消す意味、**のは僕**に附いてその所有の意味を表し、**又がは本**に附いてそれが主語であることを示すのであつて、各々文法上の意味を持つてゐるから、矢張一語として取扱ふのである。かくの如く意味の上から分け得る言語の最小單位を**單語**といふ。そして**雨・降る・僕・本・美しい**等の如く獨立して完全な意味を有する單語を**觀念語**といひ、**は・まじの**が等の如く他の語に連つて文法上の意味だけを表す單語を**形式語**といふ。形式語は觀念語よりも意味や發音が軽いから、往々その上にある音に結合し、又全く省略せら

れる。殊に外國語に翻譯する時能く消滅する。

敵こそあるなれ。……………敵こそさんなれ。

散つてしまつた。……………散つちやつた。(口語)

(音の結合)

それは花であるか。……………それ、花か。

(口語) (省略の例)

彼は書を讀む。……………彼讀書。

(漢譯)

吾等は英語を學ぶ。……………We study English.

(英譯)

隨てこの形式語は、觀念語の如く外國語から輸入せられることなく、全く自國固有の言語であるから、我が國語の眞の特色は一にこの形式語に在ると云つてよい。

單語はまた次の如く幾つか合して一つの單語を作ることがある。これを熟語といふ。

朝起。 障物。 交通機關。 年賀特別郵便。

熟語

心苦し。 刺通す。 落着く。 山山。 國國。

要所要所。 一人一人。 それぞれ。 なかなか。

右の山山以下の如く同一單語が合した熟語は特に疊語と名づける。なほ熟語には次の如きものもある。

す顔。 ま心。 はつ春。 か弱し。 さ迷ふ。

僕ら。 深み。 友だち。 嬉しがる。 春めく。

右のすまはつかさ又はらみだちがるめく等の如く、他の單語の頭又は尾に加はつて熟語となるだけで、別に獨立して用ゐないものがある。その頭に附くのを接頭語、尾に附くのを接尾語といふ。この兩者は單語として取扱はないが、その他の單語は皆之をその意味・形式・職能に依て分類すると、次の九種となる。

疊語

接頭語

接尾語

品詞

名詞。代名詞。動詞。形容詞。副詞。
助動詞。接續詞。助詞。感動詞。

是等を各々品詞といふ。その中名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞は觀念語であり、助動詞・接續詞・助詞は形式語である。感動詞は唯感歎の聲を寫したただけのものであるから、完全な觀念語でもなく、また形式語でもない。要するに我が國語はこの九品詞から成立つてゐるのである。

練習

一、次の文章を主語と述語とに分けよ。

1. 鳥は囀り蝶は舞ふ。
2. 學生は怠惰なるべからず。
3. 松島は日本三景の一なり。

4. あの時の君の顔色は土のやうだつた。(口)
5. 世界の三大國は日本・英國・米國である。(口)
6. 秀吉と秀頼とは親子であつた。(口)

二、次の文章を單語に分けよ。

1. 朝には星を戴きて出で、夕には月を踏みて歸る。
2. 山を越え川を渡りて漸く人家ある所に出づ。
3. 昨日は風もなく、散歩には頗るよき日なりき。
4. 都を離れて田舎に住む人は體力甚だ強し。

三、次の口語文中の熟語・疊語・接頭語・接尾語を指摘せよ。

1. 隣の人ほど田舎らしい人はない。
2. 君ぐらゐのことはごく／＼たやすい。僕も一度試みよう。
3. 次郎さんが眞黒な横顔に白粉を度々塗られたのは滑稽でした。
4. 僕なんかは素裸になつて小舟に飛乗り、手に手に櫓を取つて沖へ

沖へと漕いで行つた。

5. 小夜更けて人々の寢静まつた頃、ほの暗い處を一人通るのは、もの淋しいものだ。

6. 日毎に見物人が十重二十重に取巻くので見られさうにない。

第二章 名詞

- (一) 古池や蛙。飛び込む水の音。
- (二) 荒海や佐渡に横たふ天の川。
- (三) 旅に病んで夢は枯野を駈け廻る。
- (四) 勉強が幸福を生む。

右の例で傍線を施した語は有形又は無形の事物の名を表してゐる。かゝる語を**名詞**といふ。この名詞の特色は、右

名詞

の例で圈點を施したもの、如く、それに**がのにを**等の形式語を添へても又添へずに單獨にでも自在に用ゐられるといふことである。隨てこの特色を具へてゐない**確か斷然堂々**等の如きものは名詞でない。

(一) 二の五倍は十なり。

(二) 一畝は三十歩、一里は三十六町なり。

(三) 僕の家は三つ目の辻から二軒目である。(口語)

(四) 彼は第二組の一等であつた。(口語)

右の例の傍線を施した語の中で(一)(二)のものは事物の數量を表し、(三)(四)のものはその順序を表して居る。かくの如く事物の數量又は順序を表す語を**數詞**といふ。この數詞も亦名詞の一種である。

數詞

練習

次の文章中の名詞と數詞とを指摘せよ。

1. 奥山に紅葉踏分け鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき。(口)
2. 明治三十八年五月の日本海々戦に我が艦隊全部が参加した。(口)
3. 煤煙の多い都會では新鮮な空気を吸へないから健康に悪い。(口)
4. 地震があつたのは昨日の午後三時二十分であつた。(口)
5. 京都の五條の橋で辨慶が薙刀で牛若丸に斬りつけた。(口)
6. 三男の政雄は七歳で學校に入り卒業まで一番を續けた。(口)

第三章 代名詞

- (一) 予は明日汝と共に彼を訪はむ。
 (二) これとそれとはいづれが宜しきか。

代名詞

(三) ここからどこに行かうか。あすこに行かう。(口)
 (四) こちらからあちらへ行く人がある。(口)

右の傍線を施した語の例(一)は人の名の代りに用ゐ、例(二)は事物の名の代りに、例(三)は場所の名の代りに、例(四)は方角の名の代りに用ゐてある。かくの如く名詞の代りに用ゐる語を**代名詞**といふ。代名詞と名詞とはその形式上の特色を同じくするが、代名詞は名詞の如く事物の内容に立入らないで、唯その事物と「自己」との空間的關係だけを指示するものであるから、その内容如何に關せず自己との關係の深淺によつて例へば**予・汝・彼・誰**、これそれあれいづれ、ここそこあそこいづこ、こなたそなたかなた、いづかたの如くその名稱が違ふ。

練習

次の文章中の名詞・數詞及び代名詞を指摘せよ。

1. 小生の拙作を足下に呈して高評を乞はむ。
2. かの僧はいづちより來りしか。そを汝は知れりや。
3. その説を聞くもの誰か彼の博學に驚歎せざらん。
4. こは貴殿のものにあらずして、かの人のものぞ。
5. 汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。聞召せ、脊負ひまつるは奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。
6. 百姓家が谷の間々に、こゝに一軒あすこに二軒ある。(口)
7. あなたは今どちらにいらつしやいますか。あたしは昨年の夏からこちらに參つてゐます。(口)
8. だれかこゝに來て僕の荷物をあつちへ持つて行つてくれ給へ。(口)
9. おい君、あのかたはどこのおかただか知つてるか。(口)

第四章 動詞

動 體 用

詞 言 言

- (一) 花笑ひ、鳥歌ふ。
- (二) 朝早く起きて戸を明ける。(口)
- (三) 煙のある所には火あり。

右の例で笑ひ歌ふ起き明けるは事物の動作を、あるありは存在を表してゐる。此の如く事物の動作又は存在を表す語を動詞といふ。名詞・代名詞は事物の體を表すから之を體言と總稱するのに對して、この動詞の如くその用を表すものを用言といふ。形容詞・助動詞も亦この用言に屬する。隨て體言は主語となり、用言は述語となるべき性質のもの

である。動詞がその述語たるの職分を完うするがためには、次の例の如く隨時適宜にその語形を變化せしめねばならぬ。

活用	
(一) 汝と共に往なむ。	(一) 予は彼を信ぜず。
(二) 彼は既に往にたり。	(二) 彼を信じてけり。
(三) 汝と共に往ぬ。	(三) 予は彼を信ず。
(四) 往ぬる時は一人なり。	(四) 彼を信ずるものなし。
(五) 往ぬれども止めず。	(五) 稍信ずれど尙疑はし。
(六) 汝は早く往ね。	(六) 汝も彼を信ぜよ。

右の如き變化を活用といひ、往や信の如く變化しない部分を語根といひ、な、ぬ、ぬる、ぬれ、ねやぜ、じ、ず、ずる、ずれ、ぜよの如く變化する部分を語尾といふ。活用は皆此の如く六段

になつてゐるが、その各段の用法は大體次の通りである。

第一段。往なむ信ぜず等の如く、多くむず等の形式語が附いて動作の未だ起らない意味を表すに用ゐる語形であるから、之を將然形又は未然形といふ。

第二段。往にたり信じて等の如く、多く下に用言を連ねる時に用ゐる語形であるから之を連用形といふ。又花笑ひ、鳥歌ふの笑ひの如くこの第二段で語句を切る時は特に之を中止形といひ、読み、書きを習ふの読み、書き等の如くこの段で云ひするて名詞となす時は特に之を名詞形といふ。

第三段。往ぬ信ず等の如く、多く文の終りに用ゐる語形

であるから之を終止形といふ。これが動詞の本形である。

第四段。往ぬる時信ずるもの等の如く、多く下に體言を連ねる時に用ゐる語形であるから之を連體形といふ。

第五段。往ぬれども信ずれども等の如く、多くども等の形式語が附いて動作の已に起つた意味を表すに用ゐる語形であるから之を已然形といふ。

第六段。往ね信ぜよ等の如く、命令の意味を表すに用ゐる語形であるから之を命令形といふ。

以上の六段の活用は必ず五十音圖の同じ行に於て行はれるものであつて、その形式は一様でないが、次の九種に分類

することが出来る。

四段活用

一、四段活用

1. 咲か(ア列)……花咲か^ず。
2. 咲き(イ列)……花咲きた^り。
3. 咲く(ウ列)……花咲^く。
4. 咲く ……花の咲く時^に行く。
5. 咲け(エ列)……花咲^けども見^ず。
6. 咲け ……花よ、早く咲^け。

右の如く五十音圖のア列・イ列・ウ列・エ列の四段に跨つて活用するものを四段活用といふ。

○この活用の動詞は五十音圖のかきたはまらの六行だけにある。次の

上二段活用

四段活用の動詞で活用表を作れ。
歎く。 消す。 勝つ。 争ふ。 讀む。 破る。

二、 上二段活用

- 1. 起き (イ列) …… 兄は未だ起き^きず。
- 2. 起き …… 弟は既に起き^{きた}たり。
- 3. 起く (ウ列) …… 吾も早く起^きく。
- 4. 起くる …… 吾起^{くる}る時^{とき}は暗^くかりき。
- 5. 起くれ …… 吾起^{くれ}れど兄は起き^きず。
- 6. 起きよ (イ列) …… 朝早く起^きよ。

右の如く五十音圖のイ列・ウ列の二段に跨つて活用し、且ウ列に^るれ、イ列によが加へてあるものを上二段活用といふ。

下二段活用

○この活用の動詞は五十音圖のかたはまやらの六行だけにある。次の上二段活用の動詞で活用表を作れ。
盡く。 朽つ。 生^なふ。 浴^あむ。 悔^かゆ。 下^{くだ}る。

三、 下二段活用

- 1. 受け (エ列) …… 彼も賞を受け^けむ。
- 2. 受け …… 彼は賞を受け^{けて}けり。
- 3. 受く (ウ列) …… 吾も賞を受^くく。
- 4. 受くる …… 賞を受^{くる}るもの少し。
- 5. 受くれ …… 賞を受^{くれ}れど喜ば^ずず。
- 6. 受けよ (エ列) …… 努めて賞を受^けよ。

右の如く五十音圖のエ列・ウ列の二段に跨つて活用し、且ウ

列にるれ、エ列によが加はつたものを下二段活用といふ。

○この活用の動詞は五十音圖の總ての行にある。次の語を用ゐてその活用表を作れ。

得。掛く。寄す。捨つ。重ぬ。
教ふ。止む。聳ゆ。忘る。植う。

上二段活用

四、上二段活用

- 1. 見^み (イ列)……花を見^みず。
- 2. 見^み ……花を見^み飽^あきたり。
- 3. 見^み ……花を見^みる。
- 4. 見^み ……子を見^みる事親に苦^くかず。
- 5. 見^み ……昨日も見^みれど猶^{なほ}飽^あかず。
- 6. 見^みよ ……早く本を見^みよ。

下二段活用

右の如く五十音圖のイ列だけで活用し、それにするれよが加はつたものを上二段活用といふ。

○この活用の動詞は五十音圖のかなはまやわの六行だけにある。次の上二段活用の動詞で活用表を作れ。

着る。似る。干る。見る(顧みる、鑑みる、
惟みる、試みる、)射る。居る。

五、下二段活用

- 1. 蹴^け (エ列)……鞠を蹴^けむ。
- 2. 蹴^け ……鞠を蹴^け初^はむ。
- 3. 蹴^け ……鞠を蹴^ける。
- 4. 蹴^け ……鞠を蹴^ける人あり。
- 5. 蹴^けれ ……鞠を蹴^けれども疲^{つか}れず。

6. 蹴よ …… 鞠を蹴よ。

右の如く五十音圖のエ列だけで活用し、それによるれよが加はつたものを下一段活用といふ。この活用の動詞は僅に蹴るの一語だけである。以上の五種の活用を正格活用と總稱し、次の四種の不規則活用を變格活用といふ。

六、 加行變格活用

加行變格活用

1. 來 (オ列) …… 彼は未だ來^こず。
2. 來 (イ列) …… 漸く彼も來^きたり。
3. 來 (ウ列) …… 敵兵寄^りせ來^く。
4. 來 (エ列) …… 寄せ來^る敵^を蹴^らす。
5. 來 (オ列) …… 春は來^れど^もなほ寒^し。

6. 來よ (オ列) …… 明朝早く來^よ。

右の如く活用する動詞は僅に來の一語だけで、之を加行變格活用といふ。

七、 佐行變格活用

佐行變格活用

1. 爲 (エ列) …… 大いに運動を爲^む。
2. 爲 (イ列) …… 勉強を爲^し初^む。
3. 爲 (ウ列) …… 一家揃^ひて食事を爲^す。
4. 爲 (エ列) …… 今食事を爲^る者^{なし}。
5. 爲 (イ列) …… 旅行を爲^れば^も益^多し。
6. 爲 (オ列) …… 休暇には旅行を爲^よ。

右の如く活用する動詞は爲おはすの二語だけで、之を佐行

變格活用といふ。

○但し名詞形容詞及び漢語等に爲を添へて一つの動詞を構成する時は皆この活用である。

名詞	……味方す。	心す。	旅す。	ものす。
形容詞	……重くす。	甘くす。	全くす。	高くす。
漢語	……信す。	要す。	議論す。	勉強す。

形容詞の場合は發音の便宜上重んず甘んず全うす高うす等と云ふことが多い。

八、奈行變格活用

- 1. 死な (ア列)……病なれども死なず。
- 2. 死に (イ列)……一家悉く死に果つ。
- 3. 死ぬ (ウ列)……毒を飲めば死ぬ。

奈行變格活用

右の如く活用する動詞は死ぬ往ぬの二語だけで、之を奈行變格活用といふ。

九、良行變格活用

良行變格活用

- 1. 有ら(ア列)……明日も行く者有らむ。
- 2. 有り(イ列)……遊べる兒も有りき。
- 3. 有り ……五十名の級友有り。
- 4. 有る(ウ列)……能有る鷹は爪を隠す。
- 5. 有れ ……筆は有れど墨なし。

6. 有れ(エ列)……願はくは幸あれ。

右の如く活用する動詞はあり(在り)居り侍りの三語だけで、之を**良行變格活用**といふ。この活用は良行四段活用とよく似てゐるが終止形を異にする。以上に述べた動詞の諸活用と五十音圖の行との關係を表すすれば次の通りである。

變格活用	正格活用				活用
	下二段	上二段	下二段	上二段	
			得		あ
來	蹴る	着る	助く	生く	か
おはす			馳す	押す	さ
			隔つ	待つ	た
往死ぬぬ		煮似るる	尋ぬ	落つ	な
		簾干るる	與ふ	強ふ	は
		見る	責む	言ふ	ま
		鑿射るる	越ゆ	歩む	や
侍り居り			流る	老ゆ、悔ゆ	ら
		居る、用る	揺り、飢り	懲る	わ

活用の識別

語尾の假名

右の表の太字の動詞は特にその活用を記憶すべきものである。その他の四段・上二段・下二段の活用に屬すべき動詞は次の如くにして識別する。即ちすむの形式語が附くべき語尾(將然形)が、(一)書かず。讀まむ等の如くア列であれば四段活用、(二)朽ちず。過ぎむ等の如くイ列であれば上二段活用、(三)醒めず。聳えむ等の如くエ列であれば下二段活用と推定するのである。

なほ右の太字の動詞を記憶して居れば、誤り易い動詞の語尾も唯は行とや行の下二段活用だけに注意すれば足る。しかもや行下二段活用で普通使ふのは次の如きものであるから、其他は皆は行下二段活用と心得て差支へない。

甘ゆ。 嘶ゆ。 癒ゆ。 覺ゆ。 思ゆ。 聞ゆ。

口語の動詞

動詞の九種の活用は口語では次の五種となる。

消ゆ。	崩ゆ。	凍ゆ。	肥ゆ。	越ゆ。	榮ゆ。
冴ゆ。	籠ゆ。	戯ゆ。	絶ゆ。	費ゆ。	
潰ゆ。	痿ゆ。	煮ゆ。	生ゆ。	映ゆ。	冷ゆ。
殖ゆ。	吠ゆ。	見 _ま ゆ。	見 _み ゆ。	悶ゆ。	燃ゆ。
萌ゆ。					

良 變	奈 變	四 段	文語の 活用名	口 語 ノ 活 用
			活用名	
四 段			本 形	
有 ル	死 ヌ	書 ク	將 然 形	
ラ	ナ	カ	連 用 形	
リ	ニ	キ	終 止 形	
ル	ヌ	ク	連 體 形	
ル	ヌ	ク	已 然 形	
レ	ネ	ケ	命 令 形	
レ	ネ	ケ		

動詞の自他

總て動詞はその動作の性質上から之を二種に分けられる。
 花咲き、鳥鳴く。 雨降り、雷轟く。

右の文の動詞の如きは皆その動作が動作主だけに止つて他の物に直接の影響を及さないから之を自動詞といふ。

上二段	上二段	上二段	上二段	上二段	上二段
起 キ ル	見 ミ ル	受 ケ ル	蹴 ケ ル	來 キ ル	爲 ス ル
キ	ミ	ケ	ケ	コ	セ
キ	ミ	ケ	ケ	キ	シ
キ ル	ミ ル	ケ ル	ケ ル	ク ル	ス ル
キ ル	ミ ル	ケ ル	ケ ル	ク ル	ス ル
キ レ	ミ レ	ケ レ	ケ レ	ク レ	ス レ
キ キ キ	ミ ミ ミ	ケ ケ ケ	ケ ケ ケ	コ コ コ	セ シ セ
イ ロ コ	イ ロ コ	イ ロ コ	イ ロ コ	イ ロ コ	イ ロ コ

兄は木を折り、弟は草を摘む。

右の文の動詞の如く、その動作が動作主から他の物に直接の影響を及すものを他動詞といふ。又木・草等の如く、その直接の影響を蒙るものを表す語を客語といふ。

子は親に似る。 氷が水となる。

兄本を弟に與ふ。 彼は手紙を友人に送る。

右の文の動詞の如く、自動詞だけ又は他動詞と客語とだけでは述語の意味を十分に表し得ない時、親・水・弟・友人等の如くに之を補ふ語を補語といふ。随て文はその述語の性質によつて主語・述語の外に更に客語や補語を必要とする。

練習

一、次の文中の動詞を摘出してその活用を示せ。

1. 春霞立つを見棄て、行く雁は花なき里に住みや習へる。
2. 一旦緩急あらば身命を捧げて國家を守護すべし。
3. 朝顔を栽ゑたる口よりその芽ざすを待つは、子を育つる親の心もかくやあらんと思ひ知らる。
4. 彼のみに限らず、財集れば奢る習己に儉を守るとすれども、自ら許す心の出で来て、家さへ人に打任せ、樹木泉石に千金を費し、茶道蹴鞠の遊興に耽りぬ。
5. 家人に禮を薄うすれば、内には家を保つる助を失ひ、外には財を傾くるの借財多く、名に負ふ富豪の家なれども、遂に財寶を分散するに至りぬ。
6. 下僕主人に向ひ、黄金五兩を取出でて、「大利は時を得て得べく、是を元とし、この邊に小商して待ち給へ。吾は一つの思入れ侍れば、しばしの暇賜はるべし。」と涙ながらに願ふにぞ、主人も感涙に堪へ兼ね、唯前非を恥ぢ居たる。

一、次の文語文中の動詞の活用に誤あらば正せ。

1. 彼の才幹用いるに堪ゆ。 2. 見える事あり、聞える事なし。
3. 人をよく使ひ、よく教う。 4. 大砲を鑄りて砲臺に据ゆ。
5. 南枝の綻ぶことおそし。 6. 早く起きる時は心地よし。
7. 課業を終えて運動せよ。 8. 庭園に花を植ゆべし。
9. 戸をかたく閉じれば人はいすと思ひぬ。
10. この附近に塵芥を捨てることを禁づ。
11. 必ず艱苦に堪え、初志を變づることなかれ。
12. 身體衰へる時は元氣も亡びるに至るべし。
13. 我が言を用いずば老ひて後悔ふる事あらん。
14. 射らんと欲せども箭には一本の矢も餘せず。
15. 老る行く身の消えんこと何時としも覺へず。
16. 彼は凍へて死にたるにあらず、飢えて死せしなり。
17. 財貨は盡きることあれど芳名は朽ちることなし。

三、次の口語文中の動詞を抽出し、その口語の活用を示せ。

1. 早く片附けて置け。 2. 飯を食ふ時は静にせよ。
3. 金を換へて貰ひたい。 4. 稻は夏植ゑて秋收める。
5. 山を越えて行くがよい。 6. 家が榮えて業が起るのだ。
7. 一年に死ぬ人が幾人あらう。 8. 老いては子に従ふのがよい。
9. 彼は落第を恥ぢて終日籠居してゐる。
10. やうやう峠に着き、一休みして出掛けた。

四、次の口語文中の動詞の活用に誤あらば正せ。

1. 病の癒へるのを見て歸る。 2. 峻嶺を攀ずるのは困難だ。
3. 適材は適所に用ふるがよい。 4. 試験を受くる人が澤山ある。
5. 資金を得る方法は全然君に任せよう。

- 6. 早く起くる人は却て遅く寝る人である。
- 7. 明るくすることは遅くて閉することは早い。
- 8. 人に物を與えることは大變よいことだ。
- 9. 猿も木からしばしば落つることがある。
- 10. この藥を一滴でも服す時はすぐに死のう。

五、次の文中の動詞の自他に誤あらば正せ。

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1. 言路開き賢才進む。 | 2. 塵を積みて山となる。 |
| 3. 業を終りて後にすべし。 | 4. 桶の水漏りて遺す所なし。 |
| 5. 藝なければ生活の途絶つ。 | 6. 約束を違ふ時は信用を失ふ。 |
| 7. 人を漫にすゝむ事は非なり。 | 8. 家を建ちたればそこに移る。 |
| 9. 家に垂れこみて春の行方を知らず。 | 10. この問題を知らば教場より出たことを許されん。 |

六、次の動詞を自他の二様に活用せしめて短文を作れ。

- 例、 亂る (國亂る) 自動詞(下二段活用)
- 彼は校風を亂す。..... 他動詞(四段活用)
- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1. 立つ。 | 2. 流す。 | 3. 治む。 | 4. 埋る。 | 5. 連る。 |
| 6. 移す。 | 7. 照る。 | 8. 固む。 | 9. 並ぶ。 | 10. 覺む。 |
| 11. 見る。 | 12. 終る。 | 13. 碎く。 | 14. 變る。 | 15. 留む。 |
| 16. 重ぬ。 | 17. 染む。 | 18. 交ふ。 | 19. 宿る。 | 20. 顯る。 |

第五章 形容詞

- (一) 虎は猛く、羊はやさし。
- (二) 山高く、水長し。

形容詞

右の猛く・やさしは事物の性質を表し、高く・長しは事物の状態を表してゐる。かゝる語を**形容詞**といふ。形容詞は皆

活用

他動性を帯びてゐないから客語は要しないが、補語は次の如く必要なことがある。

猿は人に近し。

AはBと等し。

形容詞にも活用があるが、動詞の如く命令形・名詞形はない。

高し

- 1. 山高くとも登らむ。
- 2. 山高くして登られず。
- 3. 山高し。
- 4. 高き山を見ず。
- 5. 山高ければども人登る。

美し

- 1. 花美しくば見に行かむ。
- 2. 花美しくあらず。
- 3. 花美し。
- 4. 美しき花多し。
- 5. 花美しければ之を愛す。

活用名	本形	將然形	連用形	中止形	終止形	連體形	已然形
く活用	高し	く	く	く	し	き	けれ
しく活用	美し	しく	しく	しく	し	き	しけれ

口語の活用

形容詞の活用は右の如く、活用しく活用の二種だけである。形容詞の連用形は僅にありしててに連るだけで、その他の場合例へば「山高く聳ゆ花美しく咲く」の「高く美しく等」は副詞に轉じたものであるから、特に之を副詞形といふ。形容詞が口語に用ゐられる時は次の如く活用する。

活用名	本形	將然形	連用形	中止形	終止形	連體形	已然形
く活用	高し	く	く	く	い	い	いけれ
しく活用	美し	しく	しく	しく	い	い	いけれ

副詞形の時は高ウ美シウの如くクをウに轉ずる事がある。

- (一) 行く人も多かり。
- (二) 羊は柔順なり。
- (三) 蒼海茫洋たり。

形容動詞

右の傍線を施した語は形容詞と同じく事物の性質又は状態を表してゐるが、形容詞とその語尾を異にしてかりたりたりのいづれかで終つてゐる。かゝる語を**形容動詞**といふ。その活用は動詞の良行變格活用と同じであるが、就中連用形・中止形及び副詞形の三語形には特に注意を要する。

活用形	かりで終るもの	なりで終るもの	たりで終るもの
連用形	多かり 白かり 美しかり	明かなり 深げなり 美麗なり	茫々たり 泰然たり 儼乎たり
中止形	「多く、白く、美しく」となつて形容詞と同じである。	明かに 深げに 美麗に	茫々と 泰然と 儼乎と
副詞形		明かに 深げに 美麗に	茫々と 泰然と 儼乎と

口語の形容動詞

形容動詞が口語に用ゐられる時は、(一)かりで終るものは多

カラ。多。カリ。(多。カツ)等の如くになり、(二)なりで終るものは明カデ。明カケ。アル。明カダ。明カナ。等の如くになり、(三)たりで終るものは泰然トシテ。井ル。泰然トシタ。等の如くになる。

練習

一、次の文中の形容詞・形容動詞を抽出して活用させよ。

1. 顔は醜けれども心はいと麗し。
2. 遠き慮なければ必ず近き憂あり。
3. 畫勢非凡にして、丹青の妙譬へん方なし。
4. その介抱の懇なること尋常ならざりき。
5. 遙かなるかなたの山に爛漫たる櫻花あり。
6. 多くの兒らあつまりて美しげに見居たり。
7. 世に悟る者は稀にして、只知りたる人のみ多し。
8. 誰一人非難する事なく、唯この門の美麗をのみ稱しぬ。

9. 算筆の道にくらからざれば、事の由詳かに物語りけり。
10. 山は暗きに殊に昨日より雨もしめやかに降りて日影もさだかならず。
11. 農夫は農家に人となりて農業の事にさへ詳しければ恥しきこともなかるべし。
12. 朝顔のいと細やかなる蔓が垣根に取着く様はいはけなき兒の物を頼りて立ち初むるに似たり。
13. 案内する者の歩み様こそ悪しけれ。雪少しやはらかになりたれば一足づつ足を踏みつけて静かに下らば何事かあらん。
14. かゝる難所なれども、夏の頃天氣晴朗にして、風波静かなる日は道路少しの高低もなければ、只風景のよき所とのみ思ひて通行する人尠からず。
15. 尾國といふ所の前にて大いなる峠を登りて下る所あり。甚だ峻岨にしてたやすく通るべき道もなし。

二次の口語文中の形容詞、形容動詞を指摘せよ。

1. 人氣のない所を一人通る時は心細い。
2. 父は堅苦しい人だが、母はやさしい人だ。
3. 海が穏やかでよいから海水浴に行かう。
4. うらゝかな春の海を汽船が緩やかに通る。
5. 心齋橋筋は賑やかだが、道幅が餘りに狭い。
6. 明白な時間は云へないが、行くことは確かである。
7. 校長は嚴かな口調で、校風を亂すものは斷乎とした處置を取ると諭された。

第六章 副詞

- (一)
- 彼は常に勉強す。 顔色甚だ青し。
- 波いと静かなり。 。

副詞

(二) 僅かに二點の差にて敗れたり。
 要するに勉強は自己の爲に外ならず。
 願はくは神慮を告げ給へ。

右の常に「甚だい」は動詞や形容詞や形容動詞を修飾し、また僅かに「要するに」願はくはは句や文を修飾してゐる。かかる語を副詞といふ。副詞は次の如く他の副詞を修飾する事もある。

(三) 非常に早く走れ 更に一層注意すべし。

もつとゆつくり来い。(口語)

又あらずいなハイイイエ(口語)等の如く他人の語つた文に對する答の文を修飾又は代表する副詞もある。

練習

次の文中の副詞及びその副詞の修飾する語句を指摘せよ。

1. 只管子は親を慕ふ。
2. 彼はよも行くまじ。
3. 人はいさ心も知らず。
4. これ豈に知己ならむや。
5. 畢竟するにそは天命なり。
6. 日夜をさをさ家業を怠らす。
7. 疾風もいかでか是に過ぎむ。
8. 恐らくはかれの畫策ならむ。
9. 夜な夜な怪しきもの出で來。
10. 牛後たるより寧ろ雞口たれ。
11. 彼が最も忠實に働いた。(口)
12. それは却て君を害する。(口)
13. 僕も思はず貰ひ泣きました。(口)
14. 僕も嘗てそれを見た。(口)
15. 君は明朝早く行きますか。いゝえ、餘り早くは参りません。(口)
16. たとひいかに無理なる事ありとも、唯「あい〜」とのみ機嫌よく返事して、少しも母の氣に逆はぬやうにせり。

第七章 助動詞

助動詞

(一) 彼は泣いて語りき。(二) 父上は毎朝早く起きらる。
 (三) 傍に人なき如し。(四) 道もさぞ峻しかりけむ。
 (五) 父は海軍大將たり。(六) 當校の模範生は彼なり。
 右の傍線を施した語の如く、述語たるべき觀念語に連つて
 その述語の意味を完成せしめる形式語を助動詞といふ。
 (一) 予はかの人に道を教へられたりき。
 (二) 聖上陛下も行幸せさせたまひぬ。
 (三) 汝は大いに勉強せざるべからず。
 右の例の如く、助動詞が一つ連つただけでは未だその述語
 の意味が完成しない時は更にその下に幾つかの助動詞が

連る。

練習

次の文中の助動詞を指摘せよ。

1. 我も行ききたし。
2. あれを見られよ。
3. 犬に靴を取らる。
4. 雨降らば予は行かじ。
5. 弟に小包を持たす。
6. 甲が乙に打たれたり。
7. 第一に決勝點に入れり。
8. 明朝七時に登校すべし。
9. 静心なく花の散るらむ。
10. 行かむとすれど行かれず。
11. 正成は吉野朝の忠臣なり。
12. 汝は素志を屈すべからず。
13. あはれ今年の秋も往ぬめり。
14. 皆勤者は賞品を授けられむ。
15. 彼は弟をして本を買はしむ。
16. 皇后陛下も行啓せしめ給ふ。
17. 殿下には運動を好ませらる。
18. 弟に代數の難問を考へさす。
19. 徳川秀康卿越前に封せられ給ひし後、阿閉掃部とて武功の譽あり

し者を厚祿にて召抱へられけり。

第八章 接續詞

- (一) 明日は東又は東南の風。但し驟雨の兆あり。
- (二) 既に春とはなりぬ。されどなほ冬の心地せらる。
- (三) 彼は怠つてゐた。それだから落第したのだ。(口)
- (四) 病氣も全快致し候ふ間御安心下されたく候ふ。
- 右の文の又は但しされどそれだから間等の如く上下の語句や文章を接續する形式語を接續詞といふ。接續詞は殆ど全部他の品詞から轉來したものであつて、且つ二つ又は二つ以上の單語が合して出來たものが多い。

接續詞

練習

一、次の文中の接續詞を指摘せよ。

1. 之を求むるか抑之を與ふるか。
2. 一日に五十人乃至百人の參詣者あり。
3. 彼は代々の將軍に仕へて、しかも當時の有職なり。
4. 鯨は卵生せず。何となれば鯨は哺乳動物なればなり。
5. 明日若しくは明後日參上可致候條左様御承知被下度候。
6. さる程に内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されたり。
7. かの人を敵に渡すことやある。かくては味方に勢付きなんや。
8. 君も行くのか。それなら僕も行く。(口)
9. お待たせしました。それでは参りませう。(口)
10. 君が行くと云つたから、それで僕も行つたのだ。ところが君は來ないぢやないか。あんなことなら最初さう云へばいいのに。(口)

二次の副詞・接續詞を用ゐて短文を作れ。

蓋し。須らく。況んや。流石に。惟ふに。忽ち。敢へて。 (副詞)
隨て。將又。是に於て。加之。然るに。故に。而して。 (接續詞)

第九章 助詞

助詞

(一) 鳥が木の實を食ふ。 予こゝより彼に伴はれむ。
 (二) 吾は行くとも會はじ。 花美しくば折りて來よ。
 波は靜かなりしかども舟は一隻も出さざりき。
 (三) 人こそ見えね秋は來にけり。 有りや無しや。
 聖人すら猶かくの如し。 斯くなむありける。

右の傍線を施した形式語の如く、種々の語に附きてその語に意義を添へ又は他の語句との關係を表すものを助詞と

いふ。助詞はその用法によつて普通次の三種に分ける。

第一類。例(一)の助詞の如く、専ら體言に附いてその體言をして主語・客語・補語又はその下の名詞の所有主たらしめるもの。がのつをにこへよりからまでにてもてして等がこれに屬する。

第二類。例(二)の助詞の如く、専ら述語(用言)の下に附いてその文と他の文中の語との關係を表す、即ち接續の用をなすもの。ばいんもぶいんもがにをよりてでつ等がこれに屬する。

第三類。例(三)の助詞の如く、種々の品詞の下に附いてその上にある觀念語に特に注意を惹かしめ、或はその上にある觀念語を種々の意味から限定するもの。

はもをしぞなむこそやかすらさへだにのみばかり
よなかしななとそ等がこれに屬する。

練習

次の文中の助詞を抽出して分類せよ。

1. 有明の月だにあれや。
2. 宮も藁屋もはてしなれば。
3. 吾のみぞ行かで叶はぬ。
4. これにて微菌さへ見らる。
5. 盲が杖もて探りつつ行く。
6. 彼して見本を東京へ送らす。
7. 予も行きて買へど安からず。
8. 勉強ばかりするなよ。(口)
9. 大阪から京都まで何里か。(口)
10. 僕も兄と持つたが持てぬ。(口)

第十章 感動詞

(一) いざ、諸共に出で行かむ。

感動詞

- (二) 嗚呼、哀しい哉、かれ逝けり。
 (三) おやまあ、大變な事になつた。(口)
 (四) そら、火事だと騒ぎ立てた。(口)

右の傍線を施した語の如く、文章中の他の部分から全く獨立して、單に或種の感動を表す音に過ぎないものを感動詞といふ。感動詞の中にはそれ南無三八幡等の如く、本來は他の品詞で意味のあつた語が、唯感動を表す音となつたものもある。要するに喜怒哀樂又は恐怖驚愕等の感情に刺激されて發する音は皆感動詞である。

練習

次の文中の感動詞を指摘せよ。

1. すは、大事なるぞ。
2. あら、おもしろや。

3. やよ待て、しばし。
4. それ、防げ、侍ども。
5. さても、ノ、悪性の人かな。
6. 南無三寶、忘れて了つた。(口)
7. あはや、海底の藻屑とならむとす。
8. あはれ、此の殿は大剛の人かな。
9. 着座の公卿、あな浅ましと見給ふ。
10. えいやあ、扱も扱も、舞うたり、舞うたり。
11. いで、さらば目にも、見せてくれん。
12. 御曹司、惡源太義平、ここにあり。得たりやお、と叫んで驅く。
13. 彼が出發する時は、澤山の見送人が盛に萬歳々と叫んだ。(口)

總練習

次の文章を各品詞に分ち、動詞・形容詞はその活用を擧げ、副詞はその修飾する語句を、助詞はその類別を答へよ。

1. 然り、天下何人か友ならざるものあらむ。
2. 由來成敗を以て英雄を論ずべからず。
3. 圖らざるに賣出で來て家の内頓にゆたかになれり。
4. 苟も一の知己を得れば生命を捨つるも悔いず。況んや區々たる浮世の名利をや。
5. 公薨す、嗚呼哀しい哉。予何ぞ多言するに忍びむ。然りと雖も、予君と交はること五十餘年、遂に復一言せずして止むべからず。
6. 若し又火などを懸けば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。いかに況んや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、此の時に在るべし。相構へて相構へて隙を伺ひ玉體恙なくおはします様に思案せらるべし。
7. 細川幽齋勅使の前に畏りて、普天の下、率土の濱、王土王臣にあらずといふ事なしと承る。ましてや此の微賤の身、かく目の當り寵渥の辱きを蒙るをや。さりながら幽齋が年若き時ならむには弓矢

とる身の習なり。敢て死を白刃の際に決して、深く恩を黄泉の下に感ずる事もありぬべし。今は齡既に傾きぬ。たとへ此の戦に死する事なからむにも、餘命また幾ばくぞや。されば惜しからぬ身なるが故に、私の名譽を貪りていかでか王命には背き參らすべし。と答へ奉りて、やがて城を立ちて高野山にぞ赴きける。

第二編 品詞論(下)

第一章 音便

動詞の音便

口語で四段活用となるべき動詞が、その連用形からて、たたりに連る時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることがある。之を動詞の音便といひ、次の四種に分つ。

- (一) い音便
 - 書いて (文語・口語)
 - 書き書いた (口語)
 - 書いたり (口語)
 - 買うて (文語・口語)
 - 買ひ買うた (口語)
 - 買うたり (口語)
- (二) う音便
 - 立つて (文語・口語)
 - 立ち立つた (口語)
 - 立つたり (口語)
- (三) 撥音便
 - 讀んで (文語・口語)
 - 讀み讀んだ (口語)
 - 讀んだり (口語)
- (四) 促音便
 - 立つて (文語・口語)
 - 立ち立つた (口語)
 - 立つたり (口語)

形容詞の音便

い音便はか行が行稀にさ行、う音便はは行、撥音便はな行、ば行、ま行、促音便はた行は行ら行の動詞のみに在る。また形容詞に於ても連用形、副詞形がう音便となり、連體形がい音便となることがある。之を形容詞の音便といふ。

(一) う音便

哀しくて……哀しうて

高き哉……高い哉

寒くなる……寒うなる

美しき人……美しい人

早く行け……早う行け

悲しき日……悲しい日

なほ形容詞の副詞形が佐行變格のすと合して熟語となる時にも、う音便又は撥音便となることがある。

う音便

辱くす……辱うす

撥音便

甘くす……甘んず

全くす……全うす

重くす……重んず

練習

次の文章中に誤あらば正し、且つその理由を述べよ。

1. 仰ひて天に愧じず。
2. 先づ膽を奪いて恐れしむ。
3. 謹むで貴君の健康を祝せむ。
4. たれかに頼むで案内させよう。(口)
5. 誰か招めて餘興をさせませう。(口)
6. 敵味方手を叩ひて褒め稱えたり。
7. 飯を食う時は口を開ひて笑ふな。(口)
8. 敵は終に國を割めて和を請ふた。(口)
9. 思ふ程苦しむこともなひやうだ。(口)
10. 新しい方が高くて物がよくしひ。(口)

- 11. 卓を叩ゐて思わす快哉を叫びたり。
- 12. 負ふた子に教えられて淺瀬を渡る。(口)
- 13. 激浪岩を嘯むで飛沫は面を撲てり。
- 14. 後人その徳を慕ふて一大碑を建てたり。
- 15. 國賓の一行は帝都を辭すこととなれり。
- 16. 親の案じることのみこそ苦しふ存じ候へ。
- 17. 近からぬ友を訪ふて逢わざるはくちをし。
- 18. 首尾よふ卒業されておめでたふございます。(口)
- 19. 度々習ふても忘れるのは意を用いないからだ。(口)
- 20. 疑わしひ假名に出逢う時は辭典を引ゐて正すべし。
- 21. 久しふ逢わざりし友に逢ふて往時を物語るはいと興あり。
- 22. 強いて山を越へようとしても足が痛むで一步も進めない。(口)

第二章 動詞の時と時の助動詞

動詞の時

- (一) 雨が降る。(口)
 - (二) 雨が降つた。(口)
 - (三) 雨が降るだらう。(口)
- 右の文は皆「雨が降る」といふ動作を表してゐるが、例(一)はそれを目前の事實とし、例(二)は過去、例(三)は未來の事實として述べてゐる。此の如く主語と述語との關係が目前の事實であるか否かを言ひ表す文法上の形式を「時」といふ。
- (一) 水は低きに流る。 雨降れば地固まる。
 - (二) 家康大阪城を陥る。 元就、晴賢と嚴島に戦ふ。
 - (三) 兄は書を讀む。 君の健康を祈る。

非時	歴史的現在	現在
----	-------	----

その時を表すには右の如く動詞だけの場合もあるが、多くは時特有の助動詞を用ゐる。又動詞だけの場合でも、例(一)の如くその動作が過去・現在・未來の別なく實際上時間に關係のない場合には之を非時又は恒久時といふ。例(二)の如く歴史上の出來事を目前の一次的の事實として述べる場合には之を歴史的現在といひ、例(三)の如く單なる目前の一次的動作として述べる場合には之を現在といふ。而して動詞だけの場合は殆ど皆この現在の時を表す。

- (四) 昨日兄は書を讀みき。先日予は金を失ひけり。
 僕は去年入學した。(口)
- (五) 明日雨降らむ。僕も明日は書を讀まう。(口)
 今夏は旅行しよう。(口)

未過	來去
----	----

右の文の動詞には皆助動詞が附いてその動作が例(四)は現在以前に、例(五)は現在以後にあることを表してゐるから、前者を過去といひ、後者を未來といふ。過去にはきけり、夕(口語)、未來にはむウ(口語)、ヨウ(口語)といふ特有の助動詞を用ゐなければならぬ。

- (六) 弟は庭に遊べり。兄は書齋にて勉強したり。
 僕も本を見てゐる。(口)
- (七) 彼等は皆輕装せり。かの僧は衣を着たり。
 僕は和服を着てゐる。(口)
- (八) 徒に今日も暮しつ。日陰の雪も消えぬ。
 太陽はもう直に没してしまふ。(口)
- 例(六)は近き過去から近き未來に渉る動作が今進行中であ

現在完了

る事を表し、例(七)は動作が全く終つてその結果のみが現存してゐる事を表し、また例(八)はその動作は既に始つてゐて今尙繼續してゐるが次の瞬間には完全に終了する事を表してゐる。かゝる時を總稱して**現在完了**といひ、**たりたりつぬて井ル**(口語)**てしまフ**(口語)を現在完了の助動詞といふ。此等の助動詞殊に**たりたり**は多く過去即ち口語の**夕**と同様に用ゐられるから、動作の進行中なる事を表すには近來よく**つつあり**を用ゐる。以上述へた時の助動詞はそれぞれ必要に応じて活用し、また動詞に接續する時は一定の法則がある。各助動詞が他の助動詞に接續する時も亦この定則に據るのである。その時の助動詞の活用と接續法は次の通りである。

時		現		完		了		過		未		來	
文體		口		文		口		文		口		文	
本形	終止形	り	たり	つ	ぬ	(テ)井ル	(テ)しまフ	き	けり	む	ウ	ウ	ウ
將然形	連體形	ら	たり	て	な	井	しまハ	せ	けら	○	○	○	○
連用形	終止形	り	たり	て	に	井	しまヒ	○	けり	○	○	○	○
終止形	連體形	り	たり	つ	ぬ	井ル	しまフ	き	けり	む	ウ	ウ	ウ
連體形	已然形	る	たる	つる	ぬる	井ル	しまフ	し	ける	○	○	○	○
已然形	命令形	れ	たれ	つれ	ぬれ	キレ	しまヘ	しか	けれ	○	○	○	○
命令形	接續法	れ	たれ	てよ	ね	キキ ロヨ	しまヘ	○	○	○	○	○	○
接續法	四段の已然形、 左變の將然形、	各動詞の連用	各動詞の連用	奈變以外の連用形	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用	各動詞の連用
	ウは四段の將然形、ヨウは其他の將然形												

動詞の種類	動詞の活用形	本形	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
加變ときとの接續	來 ^く	來 ^く	こ ^し が	き ^し が	く	くる	くれ	こよ
佐變ときとの接續	爲 ^す	爲 ^す	せ ^し が	しき	す	する	すれ	せよ
其他ときとの接續	書 ^く	書 ^く	か	き ^し が	く	く	け	け

過去完了
未來完了

現在完了に過去と未來の助動詞が接續すると、次の如く別に**過去完了**・**未來完了**の二つの時を作る。

過去完了	遊べり ^{けり}	消えに ^{けり}	見てゐた ^(口)	没してしまつた ^(口)
未來完了	遊べらむ	消えなむ	着たらむ	暮してむ
			見てゐよう ^(口)	没してしまはう ^(口)
				暮してむ

意味の轉用

時の助動詞は次の如く往々時を表さないうで單に動作を確定する意味だけに轉用されることがある。

- (一) 人々の探せる時誰かこゝに在りきと叫びぬ。
 - (二) 雨降りぬべし。(雨ガキツト降ルダラウ)
 - (三) 折らば折りつべき枝。(折ツタラキツト折レサウナ枝)
 - (四) 岩間には氷の楔打ちてけり。(楔ヲ打ツタニ違ヒナイ)
 - (五) 年の内に春は來にけり。(來タツイ)
- 天つ星とぞあやまたれける。(アヤマタルルワイ)

形容詞の時

形容詞には時の助動詞が接續しないから現在・非時・歴史的現在だけしかない。隨てその他の時が必要な場合には高かりき・美しからむ等の如く形容動詞の形に變じてから時

の助動詞を添へる。

練習

一、次の文中の時の助動詞を指摘してその時を説明し、且つその活用を擧げよ。

1. 今宵もはや明けぬ。
2. 晝吠ゆる犬は打ちも殺しつ。
3. 互に恙なかりしを悦びたり。
4. 四五日のうちに花も咲きなむ。
5. 多病なりしかど壽は八十歳を保てり。
6. 親しく聞きし事ならねば誤りしるしし事もありぬべし。
7. 君が代を思ふ心の一すぢに我が身ありとも思はざりけり。
8. みよし野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は來にけり。
9. 數ならぬ身にはあれども願はくは錦の旗のもとに死にてむ。

10. わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき。

二、次の文中に誤あらば正し、且つその理由を述べよ。

1. 昨日は彼も來き。
2. 立派なる家を建てり。
3. 勇士、君の側に侍れり。
4. もう少し勉強しやう。(口)
5. 参考書を買おうと思ふ。(口)
6. その傳説を今に傳へり。
7. 秋來て蚊も既に死にぬ。
8. 早起し、故遲參せざりき。
9. 彼は昨日着ききと届けり。
10. 今度逢つたらすぐ言はふ。(口)
11. 何もかも云つてしまおう。(口)
12. 明日早く起きやうと思う。(口)
13. 梅も綻び鶯も春來ぬと告ぐ。
14. 去年彼よりの書面を受けり。
15. 朝寝せないように工夫しやう。(口)
16. 玉を献じしかども許されざりき。
17. 海外へ移住し、もの甚だ多かりし。
18. 分らないような所は進むで質問せよ。(口)
19. 努力するやう申せしが更にその甲斐あらざりし。
20. 年少ふして才のみ優れるは譬へば鋭き刀の肉薄きが如し。

第三章 動詞の法と法の助動詞

動詞の法

動詞の法とは、その動詞とその主語との關係を表す方法のことであつて、これには命令法・直説法・假定法の三種がある。

- (一) 「汝は」大いに勉強せよ。 「君は」早く來い。
- (二) 花美しく咲く。 予は遠足せざりき。

兄も明日は歸らう。(口) 彼は行くらしい。(口)

右の例(一)の如く主語に對してその動詞の表す動作の實行を強ひるのを**命令法**といひ、之には動詞の命令形を用ゐる。その主語は常に二人稱で、しかも大抵省略される。例(二)の如く主語とその述語たる動詞との關係を客觀的事實即ちその文を作る人の考を離れて單に世の中の出來事とし

命令法

直説法

て言ひ表すのを**直説法**又は**事實法**といふ。隨て客觀的事實でさへあればその事實の確否や時の如何は問ふ所でない。

- (三) 明日は我必ず行くべし。(行クコトニキメタ)

行かずとも彼は怒るまじ。(怒ラナイダラウ、怒ルマイ)

遠からむ者は音にも聞け。(遠イ者ガアツタラ其ノ者ハ云々)

松蟲の聲する方に宿や借らまし。(實際ハ貸シテクレナイ

ガ若シ貸シテクレタラ宿ヲ借ラウノニ)

右の如く主語とその述語たる動詞との關係を主觀的な事實即ちその文を作る人の心の裏にのみ存在する事實として假定しようとする時に用ゐるのを**假定法**又は**思想法**といふ。この法は法の助動詞を用ゐるか又は動詞の將然形

假定法

にばを、終止形に^ごごもを附けた條件形を用ゐて表すのであつて、その事件が(一)稀有な事、(二)絶無な事、(三)現在の事實に反する事、(四)未來のみに屬する事、(五)厭ふべき事であるか、又は(六)謙遜の爲に故意に稀有な事件として絞する時等に之を用ゐる。假定法の條件形と直説法の條件形とは混同し易いから注意せねばならぬ。

假定法……雨降らば

今降ツテハ井ナイガ若シ降ツタラ、
稀有デハアルガ若シ降ルナラ、

直説法……雨降れば

今事實降ルカラ、
降ルト(降ル時ハ)、

假定法……雨降るとも

今降ツテ井ナイガ、タトヒ降ツタツテ、
タトヒ降ツテモ、

轉來の法の助動詞

直説法……雨降れども

今事實降ルケレド、
降ル時ニモ、

假定法の條件形の次は多く法の助動詞で結ぶ。例へば、

雨降らば皆困るべし。

雨降るとも花は散るまじ。

法の助動詞には時の助動詞から轉來したものと、法特有のものがある。その轉來したものはきつぬの將然形にばの附いた條件形のせば、てば、なばと未來のむとである。就中せばは事實に正反對な假定のみに用ゐる、てば、なばは特に未來のみに關する事を言ひ表すことが多い。

(一)吹く風と谷の水としなかりせば、み山がくれの花を見
ましや。

歸る雁西へ行きせば、玉章に思ふことをば書きつけて

まし。

(二) 梅が香を袖に移して留めてば春は過ぐとも形見ならまし。

(三) 猶詳しく尋ね問へ。人里に遠ざかりなば詮方もあるまじ。

次の如くむを連體に用ゐたのは殆ど皆法の助動詞である。

(四) 我と思はむ者は出でて戦へ。(稀有な事)

山はさけ海はあせなむ世なりとも。(絶無な事)

我に同ぜむ輩は起立すべし。(謙遜の意味)

金あらば我も買はむものを。(事實に反する事)

連體でなくとも次の如きは皆法の助動詞である。

圖らざりき、今日君に逢はむとは。上野に行かむと欲す。

法特有の助動詞

櫻を見むとて上野に行く。いかでさる事のあらむ。法特有の助動詞には、肯定の意味のべし、まじと、否定の意味のじまじと、過去の意味のけむとがある。それらの助動詞の活用及び接續法は次の通りである。

本形	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	接續法
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○	真變の連體形・ 其他の終止形
まし	ませ	○	まし	まし	ましか	○	各動詞の將然形
じ	○	○	じ	じ	じ	○	各動詞の終止形・ 其他の終止形
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	各動詞の連用形
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○	各動詞の連用形

べし

べしは用法が頗る廣い。その下に他の助動詞が続く時は
べかり(べくありの約で活用は良變、但命令形はない)となる。

- (一) 義務……親には孝を盡すべし。
 - (二) 適當……明智光秀の逆意はにくむべし。
 - (三) 決意……御名殘惜しくは候へども御暇申し候ふべし。
 - (四) 可能……その知には及ぶべく、その愚には及ぶべからず。
 - (五) 命令……はやばや敵陣の後の山へ押廻すべし。
 - (六) 想像……誠にさもあるべし。
 - (七) 許容……さらば汝はいつにても歸るべし。
- べしの用法は普通右の如くであつて、稀有又は反事實の時
には用ゐないが、ましは反事實の假定に多く用ゐる。また
その將然形・已然形にばの附いた條件形のませばとましか

まし

ばとは全く同一の意味で、共に反事實を表す。

- (一) 世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけから
まし。
心あらば問はましものを梅が香は誰が里よりか匂ひ
來つらむ。
- (二) 飛鳥川柵渡し堰かませば流るゝ水ものどかにあらまし。
- (三) 誰行きて君に告げまし道芝の露諸共に消えなましかは。
なほましはべしと同様に適當・決意・想像等の意にも用ゐる。
- (四) 嬉しさも哀れもいかに答へまし故里人に問はれまし
かは。(適當)
- (五) 身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大
和魂。(決意)

じ・まじ

(六) 朝霧や立田の山の里ならで秋來にけりと誰か知らまじ。
し。(想像)

じ・まじは共に口語ではマイといひべしの否定のべからず
に似てゐるが、じは一人稱で決意、二人稱・三人稱で想像を示
し、まじは決意・想像・義務・適當の意を示すことが多い。

- (一) 菊の花手折りては見じ。(決意) (二) そは空言にはあらじ。(想像)
- (三) この事母には申すまじ。(決意) (四) 明日も彼は來まじ。(想像)
- (五) 君に不忠なるまじ。(義務) (六) こはすまじき事なり。(適當)

けむ

けむは恐らく過去のけりの將然形けらに法の助動詞むを
連ねたものであらう。隨て次の例(一)の如く過去の不確な
事實を假定するのが常であるが、往々例(二)の如くそれが確
實であつても謙遜の爲に故意に確言するのを避けて假定

の形を用ゐることがある。口語ではけむをタデアラウ又
はタラウといふ。

- (一) 君が代の年の數をば白妙の濱の眞砂と誰かしきけむ。
夏山に戀しき人や入りにけむ聲ふりたて、鳴く時鳥。
- (二) 天智天皇の詠ませ給ひけむ御歌に「秋の田のかりほの
庵の苫をあらみ我が衣手は露にぬれつ」とあり。

なほ假定法の一種に、客觀的には存在しない事實を假定し
てそれを要望する意味を表すのがあつて、それにはなむば
やしながもがを用ゐる。此等は皆活用しないが、その述語を
完成するといふ役目から見、之を希望の法の助動詞とい
ふ。

なむ

希望の法の
助動詞

なむは普通三人稱に用ゐるが、古くは單にな又はねと云つ

て二人稱にも用ゐた。これは動詞の將然形に接續する。

早く咲かなむ。(早ク咲イテクレタイイニ)

ならばざらなむ。(見做バナイデクレタイイニ)

ばやは普通一人稱に用ゐ、そして動詞の將然形に接續する。

春や昔の月に間はばや。(間ウタラナア)

過ぎにし方を今になさばや。(今ニナシタイ)

しがも普通一人稱に用ゐる。これは動詞の連用形に接續し、その下には多くなもの形式語を添へる。

咲かせてしがな。(咲カセテミタイモノダナア)

甲斐が額をさやかにも見しが。(見タイモノダ)

もがは特に人稱を定めずに動詞以外の觀念語に直接又はごにを隔てて接續し、尙その下には多くなものも添へる。

もが

しが

はや

逢ふ由もがな。(逢フ仕方がアツタライイナア)

美しき花にもが。(美シイ花デアツタライイ)

命ともがな。(命トナツテ井タライイナア)

早くもがな。(早カッタライイナア)

常にもがな。(常デアツタライイナア)

近文に於て希望の意味を表すには餘りこの假定法の希望の助動詞を用ゐないで、次の如く直説法を用ゐる。

(一) 彼も旅行したしと云ふ。君も遊びたいのか。(口)

(二) 入學することを欲す。休むことを望む。

(三) 花見に行かまほし。(現代文には用ゐない)

右の欲す望むは動詞であり、たし(口)は元來形容詞であり、まほしはまく(未來の助動詞むの延音)と形容詞のほしとが合

希望の直説法の助動詞

したものであるが、就中たしたい(口)まほしの三語はその役目から見て矢張希望の直説法の助動詞とする。このたしたい(口)は久活用で動詞の連用形を受け、まほしは志久活用で動詞の將然形を受ける。

形容詞の法

形容詞はその連用形に希望の法の助動詞のものが附くだけであつて法の助動詞が附かないから、その將然形にばごごもの附いた假定法の條件形と直説法とがあるだけである。

假定法……花美しくば

今美シクハナイガ若シ美シカツタラ、
美シクハアルマイガ若シ美シイナラ、

直説法……花美しくければ

今事實美シイカラ、
美シイト、(美シイ時ハ)

假定法……花美しくとも

今美シクハナイガタトヒ美シカツタラ、
美シクハアルマイガタトヒ美シクテモ、

直説法……花美しくけれども今事實美シイケレドモ、

假定法の條件形を用ゐるべき場合は動詞と同じである。

練習

一、次の文中の條件形と法の助動詞の部分を解釋せよ。

1. かしこには道なければ知れ申すまじ。
2. 農事に怠りなば田畑は悉く不作なるべし。
3. 我に物學ばむ輩はさる振舞あるべからず。
4. 山里に散りなましかば櫻花匂ふ盛りも知られざらまし。
5. 今朝來鳴き未だ旅なるほととぎす花橋に宿は借らなむ。
6. 我宿の尾花が上の白露を消たすて玉に貫くものにもが。
7. 花見むと植ゑけむ人もなき宿の櫻は去年の春ぞ咲かまし。

8. さいばりに衣はすらむ、雨降れど移ろひ難し、深く染めてば。
 9. 逢坂の關に我が宿なかりせば、わかるゝ人は頼まざらまし。
 10. 臯月來ば鳴きも奮りなむ、郭公まだしき程の聲を聞かばや。
 11. 石走る瀧無くもがな、櫻ばな手折りても來む見ぬ人のため。
 12. いざ櫻われも散りなむ、一盛り有りなば人にうきめ見えなむ。
 13. 思ふどち春の山べにうちむれて、そこともいはぬ旅寢してしが。
 14. 同じくば我が身も露と消えなむ、消えなばつらき言の葉も見じ。
- 二、次の文中の誤を正し且つその理由を述べよ。
1. 恩を報ひまじ。
 2. 狼に紙を捨ててるべからず。
 3. 雨降りたらば彼は未だ來ず。
 4. 富士山の雪は今も絶へまじ。
 5. 商品に手を觸れるべからず。
 6. 過てば改むるに憚る事勿れ。
 7. 明日雨降れば遠足は止めむ。
 8. 若し用事を終れば參るべし。
 9. 予が屢戒むるとも彼は毫も悔悛の色なし。

動詞の相

動詞に特殊の助動詞を連結する爲に、その文中の主語が補語に變ずることがある。これを動詞の相といひ、その助動詞を相の助動詞といふ。

小供が犬を打つ。

兄が弟に字を教ふ。

右の打つ、教ふは動詞本來の形であるから之を起相といふ。犬が小供に打たる。弟が兄に字を教へらる。

第四章 動詞の相と相の助動詞

10. 當日若し雨天なれば順延の事と心得るべし。
11. 明日はいかに忙しけれども君を訪問するべし。
12. 萬一意外なる障碍の起ることあれどもそれに屈すな。
13. たとひ我が身の上をば損すれど他の身の上には損をかけまじ。

右の如くるらるを連ねると、もとの主語は皆補語となり、もとの客語又は補語が主語となつてその動作を受ける形となる。之を受相又は受身といふ。この受相の主語となるものには普通無生物を用ゐない。

小供にも犬が打たる。兄にも弟に字が教へらる。

此の如く新に補語となつたものにその動作の能力があることを表すものを能相又は可能といふ。

また此等と類似した形で、次の如くその動作が自然に起つて來て避け難い意味を表すものを勢相又は自發といふ。

私が故郷を思ふ。(起相) 故郷が私に思はる。(勢相)

私が弟の前途を憂ふ。(起相)

弟の前途が私に憂へらる。(勢相)

以上の三相には同じ助動詞るらるを用ゐるが、次の如く他の助動詞すさすしむを用ゐると、起相の時に文中に見えなかつた語が主語となり、元の主語が補語となる。そしてその主語となる者が他の者を使役してその動作をなさしめることを表す。之を役相又は使役といふ。

大人が子供に犬を打たす。

父が兄をして弟に字を教へさす。(教へしむ)

役相の時に補語であるべきものが屢客語になる事がある。

彼をして行かしむ。彼を行かしむ。

下女に働かす。下女を働かす。

相の助動詞は次の如き活用と接續法を持つてゐる。

相の助動詞の活用と接續法

相	受相		能相		役相	形
	る	れ	る	れ		
本形	らる	られる	らる	られる	さす	各動詞の將然形
將然形	られ	られる	られ	られる	させ	受相のらるに同じ
連用形	られ	られる	られ	られる	させ	受相のらるに同じ
終止形	らる	られる	らる	られる	す	受相のるに同じ
連體形	らるる	られるる	らるる	られるる	する	受相のるに同じ
已然形	られ	られる	られ	られる	すれ	受相のらるに同じ
命令形	れよ	られよ	○	●○	させよ	受相のらるに同じ
接續法	四段・奈變・其變の將然形 右以外の將然形					

口語ではしむ以外のものをそれぞれ下一段に活用させて用ゐる。但し四段言の能相だけは多く動詞の語尾と助動

詞のれ音とが約せられる。

書かれる。…書ける。 讀まれない。…讀めない。

またさすが佐變に附くと、その動詞の語尾のせが省かれることが多い。

勉強せさす。…勉強さす。 旅せさせよ。…旅させよ。

練習

一、次の文中の相の助動詞の意味と活用とを答へよ。

1. 彼は故郷に送り返さる。
2. 晝は兵を出して守らす。
3. 亡き父の事のみ思はる。
4. 彼の一族は悉く誅せらる。
5. 家に火をかけさせて自害す。
6. 彼を助けられれば助けたし。
7. かの山は嶮しくとも登らる。
8. 諸將をして敵を撃たしむ。
9. 彼の事が思遣られて氣の毒に感せらる。
10. 僕だつて登れたのだが彼に勧められて途中から引返した。(口)

二次の文中の誤を正し且つその理由を述べよ。

- 1. 徒に人を驚かせしむ。 2. 表彰されべき人は誰ぞ。
- 3. 彼に近づかしむるべからず。 4. その文章は僕に書かし給へ。
- 5. 常に注意致させべき事なり。 6. 彼をして勝を得させしめたり。
- 7. われをして安らかに世を過ぎさせしむ。
- 8. 己の云ひにくきことは皆人に言はさず。
- 9. 枯木に花を咲かしたりといふ昔譚あり。
- 10. そのようなことは到底許可しられまい。(口)
- 11. 人をして見せしめしかど既にあらざりき。
- 12. 子に外國新聞を譯さして聞くを樂とせり。
- 13. いかにも悲しけれども人に泣聲を聞かれまじ。
- 14. 受験者はこの一節を讀まされて講義さゝる。
- 15. その事業は永く國民に記憶されべきものなり。

三次の文を口語に譯せよ。

- 1. 常に昔が偲ばれる。 2. 船頭に舟を漕がす。
- 3. 彼が人に辱しめられる。 4. 病人の事が案せられむ。
- 5. 弟に毬を受けさせたり。 6. 予もかの山は越えられじ。
- 7. その問題は解かるべし。 8. 俊寛は何島に流されけむ。
- 9. 彼等をして攻めしめば必ず陥られむ。
- 10. 私は唱歌を歌はせられし時辛うじて歌はれき。

第五章 尊敬及び謙遜の助動詞

- (一) 父上は東京に行かる。
- (二) 主上も臨幸させさせらる。
- (三) 目鏡もて敵の備を望みます。
- (四) 皇后陛下も行啓せしめ給ふ。

尊敬の助動詞

(五) 攝政宮殿下も式場に立たせおはす。

右の傍線を施した助動詞の如く、その附屬してゐる動詞の動作主を尊敬する場合に用ゐるものを**尊敬の助動詞**といふ。これには普通受相・役相の助動詞と、動詞から轉來した**ます・給ふ・おはす**とを用ゐるが、役相の助動詞は多くその下に**らるます・給ふ・おはす**を重ねる。動詞から來たものは各動詞の連用形に接續し、**おはす**は佐變、其他は四段言である。

- (一) 愚弟もかかることを申し侍り。
- (二) よき敵に組まむとて求め候ふ。
- (三) その旨いまだ聞き給へ侍らず。

謙遜の助動詞 (第一種)

之を**謙遜の助動詞**といふ。その**給ふ**(下二段)は**見る・思ふ・聞く**の三語だけに附く助動詞、**侍り**(良變)・**候ふ**(四段)は動詞から轉來した助動詞で、共に動詞の連用形を受ける。

- (一) 予は君を思ひ聞ゆ。
- (二) 彼は徳川殿に仕へ參らす。
- (三) 彼は主君の御跡を弔ひ奉る。
- (四) 汝はこれを父君に見せ申すか。

右の**聞ゆ**(下二段)・**參らす**(下二段)・**奉る**(四段)・**申す**(四段)等の如く、その附屬してゐる動詞の客語又は補語となるべきものを尊敬してその動詞の表す動作を謙遜して云ふのも亦謙遜の助動詞の一種である。此等は皆動詞から轉來したもので、共に動詞の連用形に接續する。

謙遜の助動詞 (第二種)

口語の尊敬
及び謙遜の
助動詞

口語の尊敬及び謙遜の助動詞は凡そ次の如きものである。

謙遜	尊敬							助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	接續法	
	二第	一第	下サル	遊バス	ナサル	ナル	ガラル									ラレル
申ス	マ	マ	下サル	遊バス	ナサル	ナル	ガラル	ラレル <td>セラレル</td> <td>レ</td> <td>レ</td> <td>レル</td> <td>レル</td> <td>レレ</td> <td>レヨ</td> <td>四段の將然形</td>	セラレル	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ	四段の將然形
申サ	マセ	マセ	下サラ	遊バサ	ナサラ	ナラ	ラレ	ラレ	レ	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ	右以外の將然形
申シ	マシ	マシ	下サリ	遊バシ	ナサリ	ナリ	ラレ	ラレ	レ	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ	各動詞の連用形 又は左變となり 得る名詞、但し ナルはそれとの 間に多く助詞の 「ニ」を挿む
申ス	マス	マス	下サル	遊バス	ナサル	ナル	ラレル	ラレル	レ	レ	レル	レル	レル	レレ	レヨ	各動詞の連用形
申ス	マ	マ	下サル	遊バス	ナサル	ナル	ラレル	ラレル	レ	レ	レル	レル	レル	レレ	レヨ	各動詞の連用形
申セ	マ	マ	下サレ	遊バセ	ナサレ	ナレ	ラレ	ラレ	レ	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ	各動詞の連用形
申セ	(マ)	(マ)	下サレ	遊バセ	ナサレ	ナレ	ラレ	ラレ	レ	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ	各動詞の連用形

謙遜の**マス**は今日では第二人称にも多く用ゐられる。但しその命令形は尊敬の助動詞の下に附いた時にのみ用ゐる。また謙遜の**申ス**も今日の候文では尊敬にも謙遜の第一種にも用ゐられる。しかし此等の用法は正確なものは云へない。

練習

次の文中の尊敬及び謙遜の助動詞の用法を説明せよ。

1. 何條さる事をなしはべらむ。
2. いかで尋ねむと思ひ給ふるを。
3. あへなくも空しき骸となりましぬ。
4. 折角では御座いますが御断り申しませう。(口)
5. 是非とも御出で遊ばして十分御批評下さい。(口)

6. 御待ち申してゐますがまだ御見えになりません。(口)
7. さう申してゐられましたから多分御出席なさるでせう。(口)
8. 猶高う吹かせおはしませ。え聞き知りさふらはじと申せば。
9. 才深き師に預けきこえたまひてぞ學問せさせ奉り給ひける。
10. 徳川殿關白殿に御見參の事終りて後程なく歸らせ給ひ、頓て大政所をも返し參らせらる。この度は井伊直政して送らる。

第六章 推量及び打消の助動詞

(一) もみち葉の流れととまる湊には紅深き波や立つらむ。
 (二) 春霞はや立ちにけり、古郷の吉野の深雪今や消ぬらし。
 (三) 立田川紅葉みだれて流るめり、渡らば錦中や絶えなむ。
 右のらむらしめりの如く、その附屬する動詞の表す動作を

推量の助動詞

推量するものを推量の助動詞といふ。この推量もその文を作る人の心の働ではあるが、假定法の如く單にその人の心の裏にのみ存在する事實として假定するのではなく、現在の客觀界に多少でも根據のある事を言ふのである。三語の中らむは最も不確、めりは最も確實な推量である。推量の助動詞の活用・口語譯及び接續法を次に示す。

本形	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	口語譯	接續法
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○	ダラウ	各動詞の終止形 但し其變は連體 形
らし	○	○	らし	らし	らし	○	ラシイ	
めり	○	○	めり	める	めれ	○	ヤト見エル、 ヤウダ	

なほらむはその動詞の表す動作は確實であるがその原因

を疑ふ時に用ゐることもある。

やどりせし花橘も枯れなくなると時鳥聲絶えぬらむ。
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ。
別れてふ事は色にもあらなくに心に染みて侘しかる
らむ。

らしめりは近文には用ゐられない。口語では多くダラウ
(活用しない)ラシイ(しく活用)を用ゐ、その接續法は文語と同
じである。

直説法に於て、假定法のまじじに似て、打消の意味を表すに
は次の如くすぎりを用ゐる。これを打消の助動詞といふ。

(一) 雨降らず。

(二) 彼は行かざりき。

このすぎりは共に各動詞の將然形に接續し、ずは、ずず、ずぬ。

打消の助動詞

ね〇と活用して命令形がないが、ざりはずとありとが結合
したのであるから良行變格に活用する。又ずの連體形の
ぬは往々次の如くなくといふ延音となることがある。

深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘み
けり。

今日口語の打消の助動詞に用ゐるナイは、恐らくこのなく
が變訛したのであらう。口語ではナイ(く活用)と又(活用ズ・
ズ・又・又・ネ・〇)とを用ゐる。この又は又ンともいふ。

練習

一、次の文中の推量及び打消の助動詞の活用を答へよ。

1. 僕は行きません。(口)

2. 貰はない人はないか。(口)

3. 来ないけれども行つて構はぬ。(口)

4. この雨で花も散るだらう。(口)

5. 彼は泳げなくても毎日海に行つてゐるらしい。(口)
6. 吉野河瀧の上なる山櫻岩越す波の花と散るらし。
7. 時わかぬ嵐も波もいかなれば今日あら玉の春を知るらむ。
8. もみち葉を風に任する手向山幣も取りあへず秋は往ぬめり。
9. もみち葉の流れざりせば立田川水の秋をばたれか知らまし。
10. 心ざし深く染めてし居りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ。

二、次の文中の誤を正し且つその理由を述べよ。

1. 君もあの人を信ずらしいね。(口)
2. つくづくと御覽じさせ給へず。
3. 假令戦へども勝つ事能わざらん。
4. 大いに祝さずんばあるべからず。
5. 學生は二艘の舟に分乗するらむ。
6. 彼はいくら待つてゐても來ない。(口)

7. 人の感情を害さざる様にするべし。
8. 砲兵工廠に命じて銃砲を鑄さしむるらし。
9. 彼には兄が附いてゐて本を讀ますらしい。(口)
10. 汝若し今にして斷然之を廢さずば後必ず悔うることあり。

第七章 指定詠歎比況の助動詞

指定の助動詞

- (一) これは花なり。 この花は美しきなり。
- 予は花を見るなり。
- (二) 父は海軍大將たり。 父子共に忠臣たり。
- 右のなりは事物有様動作を、たりは事物を指定する意を表すので之を**指定の助動詞**といふ。なりは體言と用言の連體形とに、たりは體言のみに接續し、共に良行變格に活用す

る。口語では**デアル・デス・ダ**を用ゐるが、用言の時はそれとの間に助詞の**ノ**を挿む。**デアル**は四段言であるが、**デス**は「**デセ・デシ・デス**」**ダ**は「**ダラ・ダツ・ダ**」と活用して共に連體形以下はなく、又中止形には**デ**を用ゐる。指定の助動詞は又次の如き意味に用ゐる。

辨慶なる者。(辨慶トイフ者)

京なる友。(京ニアル友、京ニラル友、京ノ友)

親は親たり。(親ハ親ラシクシテヤル)

次の文に用ゐた**なり**、**けり**及び**かな**は共に詠歎の意を表すものであるから之を詠歎の助動詞といふ。

(一) 門松ひさく聲すなり。(聲ガスルワイ)

(二) 風に亂るる紅葉なりけり。(紅葉デアルワイ)

詠歎の助動詞

(三) 淀の川瀬の月を見るかな。(川瀬ニ映ル月ヲ見ルワイ)

我が家遠き野道なるかな。(野道デアルワイ)

このなりは指定のなりと異つて、動詞の終止形(良變は連體形)に接続し、活用も終止(なり)連體(なる)已然(なれ)の三形しかない。けりは過去の助動詞から轉來したものであるが、なりと同じ活用形である。またかなは活用がなくて感動詞に似てゐるが、常に用言(指定の「なる」は多く略せられる)の連體形に接続して述語を完成するから矢張助動詞とする。助動詞には今一つ次の如く比況の意味を表すものがある。これを**比況の助動詞**といひ、如しの一語が之に屬する。

(一) 光陰は矢の如し。(二) 歲月は流るる如し。

(三) 漕ぎ行く舟の跡なきが如し。

比況の助動詞

第八章 第一類の助詞の用法

第一類の助詞は悉く體言にのみ附くものであるが、その用法は色々であるから次に之を説明する。

(一) 花が咲く。 高き(山)が白馬山なり。

白雪の|かかる枝に鶯の|鳴く。

(二) 我が國。 梅が香。 君が代。

人の命。 彼の|本。 木の實。

がのはその上の體言が例(一)の如く主語であり、例(二)の如くその下の體言の所有主であることを表す。

(三) 甲斐が嶺。 佐渡が島。 富士の山。

五位の|藏人。 武藏の|國。 露の命。

がの

つ

を

に

がのはまた右の如く「にある」といふ「の如き」等の意味で二つの體言を結び付けるにも用ゐる。

國つ神。 國つ社。 天つ神。 天つ風。 末つ方。

沖つ白波。 天つ御空。

つは右の如くの例(二)(三)と同じ用法である。

(一) 頼朝、義仲を討つ。 予は友を訪ぬ。

(二) 國境を出づ。 故郷を去る。

(三) 公園を散歩す。 鳥が空を飛ぶ。

をは例(一)の如く客語に付き、例(二)(三)の如く補語(文章論第一章参照)に附く。例(二)は動作の起點を、例(三)はその場所を示す。

(一) 都に住む。 机に載す。 (動作の場所)

(二) 鐘の音に目をさます。 花見に行く。 (動作の原因)

- (三) 人に優る。禽獸に劣る。(動作の比較)
- (四) 氷が水になる。水を氷になす。(動作の結果)
- (五) 犬が子供に打たる。鉛筆を弟に買はす。(動作の主體)
- (六) 弟に本を與ふ。生徒に地圖を示す。(動作の客體)
- (七) 月に叢雲、花に風。梅に鶯、竹に雀。(語句の重複)
- (八) 午前五時に出發す。三月十日に開會す。(轉來の副詞)
- にの用法は右の如く種々ある。例(六)の弟生徒の如く客語と同じ様に動作の直接の影響を蒙る補語を普通**第二客語**又は**第二目的**といふ。
- (一) 氷が水となる。これを花といふ。
- 予は「これは花なり」と思ふ。彼も「行く」といへり。
- (二) 日本と露國(と)が戦ふ。梅と松(と)の鉢植。

より・から

- それが甲なる(こと)と乙なる(こと)とは問ふ所にあらず。
- (三) 雪と散る。草葉の露と消ゆ。
- (四) 兄弟と遊ぶ。予は彼と旅行す。
- この例(一)は動作の標準を、例(二)は語句の並列を意味し、例(三)は「の如く」例(四)は「と共に」の意味を表す。
- 東京へ行く。東へ飛べり。こなたへ来る。
- へは右の如く方向を示すのであるが、近來場所を表すにと嚴格に區別しない。
- (一) 大阪より京都に至る。朝から晩まで。
- (二) 徒歩より行く。舟から行く。
- (三) 金は銀より重し。これよりあれを好む。
- (四) 君より外に頼む人なし。泣く(事)より外に詮術なし。

まで

よりからの例(一)は場所の起點や時間の標準を示し、例(二)は「にて」の意味を表し、又よりの例(三)は比較の意、例(四)はその事物に限る意を表す。からは多く口語に用ゐる。

- (一) 東京まで行く。 十一時まで勉強す。
- (二) 花と見る(程)まで雪が降る。 それ(程)まで思ふな。
- (三) 天の川冬は空までこぼるらし。

までの例(一)は場所や時間の極限を、例(二)は事柄の程度を表し、例(三)は「さへ」の意味を表す。

- (一) 東京にて之を求めたり。 庭にて遊ぶ。
- (二) 鉛筆にて字を書く。 杖もて犬を打つ。
- (三) 舟にて淀川を下る。 電車にて行く。
- (四) 彼して届けさす。 彼(を)して買はしむ。

にて・もて

- (五) 二人して漸く持つを得たり。

例(一)の「にては」に於て「の」の意味で場所を示し、その他の「にて」もてしては頗る類似した用法で、その動作に使用する道具又はその動作の被役者を表す。口語では此等の場合に多く「デ」を用ゐる。

練習

次の文中の第一類の助詞の用法を説明せよ。

1. 十五歳より十七歳までのものは入學を許す。
2. あの女の子は家の内で一人して鞠で遊んでゐる。(口)
3. 諸共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし。
4. 梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽根白妙に沫雪ぞ降る。
5. 天の原富士のけむりの春の色の霞になびく曙の空。

- 6. 梅の花誰が袖ふれし匂ひぞと春や昔の月に問はばや。
- 7. 大阪から舞鶴へ行くにはどの汽車で行つたらよいか。(口)
- 8. 今日といへば唐土までも行く春を都にのみと思ひけるかな。
- 9. 袖ひちて我が手にむすぶ水の面に天つ星合ひの空を見るかな。
- 10. 花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで。

第九章 第二類の助詞の用法

第二類の助詞は皆述語を成す用言の下即ち文章の形をしたもの下に附いて、それを他の文に結付けるものである。

- (一) 急がば、まはれ。 天氣よくば、散歩せむ。
- (二) 雉子も鳴かずば、うたるまじ。 水清ければ、大魚棲まず。
- 雨降れば、地固まる。 彼が勧めしかば、予も行きけり。

は

は

ばが例(一)の如く將然形に附けば假定法、例(二)の如く已然形に附けば直説法の條件形を表す。口語ではばが已然形に附いても假定法の條件形を表すことが多い。

- (一) 繪に書くと、筆も及ばじ。 山は高くとも、登るへし。
- 君に打たるとも、恨みじ。
- (二) 問へど、答へず。 痛けれども、泣かず。
- 人に笑はるれども、恥ぢず。

右の如くとともは動詞の終止形と形容詞の將然形とに附いて假定法、ごともはその已然形に附いて直説法の條件形を表す。助動詞との接續も亦これに準ずる。現代文では誤解を生じない限りごともどもの代りにもを連體形に附けて用ゐても差支へない。

彼が如何に乞ふも(乞ふとも)許さじ。

花は美しきも(美しけれども)見には行かず。

口語では多く假定法に**テモデモ**、直説法に**ケレドモ**を用ゐる。

がにを

(一) 昨日は雨なりしが、彼を訪ひき。

(二) 日は暮れかかるに、宿るべき家もなし。

(三) 行かじと思ふを、何とてかくは勸むるぞ。

がにをは共に右の如く用言の連體形に附いて、その次に來る文の表す事實が不自然又は意外なることを表す。がは口語でも同じであるが、**にを**は口語では**ノニ**となる。

かかることありしより、遂に來ずなりぬ。

口語の**ノデ**に相當するよりは連體形に附いて、その次に當

より

然の結果を表す文の來る意味を表す。

てで

(一) 雨霽れて、虹立つ。 水近くて、風涼し。

人に助けられて、下山せり。 人に知られて、來る由もがな。

(二) 何事をも爲さで、歸りぬ。 人にて知られて、來る由もがな。 人は右の例(一)の如く連用形に附いて、事が既に終つて次に移る意味を表す。このてが形容詞、打消の助動詞のす、又は形容動詞の中止形に接續する時は多くしてとなる。例(二)のでは打消の助動詞のすに、このての附いたすてが約まつたものであるから、將然形の下を受ける。口語でもては同じであるが、**で**は**ナイデ**となる。

つ

(一) 二人は語りつつ、道を歩めり。

(二) 消え入りつつ、えもいひやらず。

(三) 富士の高嶺に雪は降りつつ。
つつは普通例(一)の如く動作の同時に起る意を表し、口語ではナガラといふ。例(二)のつつはてと同じやうな意味、例(三)は現在完了の助動詞のつを重ねたのと全く同じで「降ツテキル、降ツテキル」の意味である。これは元來助動詞のつを重用したのであるから、連用形を受ける。

練習

一、次の文中の第二類の助詞の用法を説明せよ。

1. 宿りせし人の形見か藤袴忘れがたき香に匂ひつゝ、
2. 急がずば濡れざらましを旅人のあとより霽るゝ野路の村雨。
3. つひに行く道とは豫て聞きしかど昨日今日とは思はざりしを。
4. 大雨も厭はで時の堂へ行きけるが、辛うじて其處に辿り着きて見

るに、堂の内赫々として火影の輝きければ、いといふかしく思ひて内を窺ひ見るに、二人の賊ども雨に濡れたる衣類を焚火にて干し居たり。

二、次の文中の誤を正し且つその理由を述べよ。

1. 死ぬと生くとの境なりき。
2. 都合あしとも約束を違はず。
3. かゝる事ありしと人に言ふな。
4. 刀折れ矢盡くるともいかで屈すべき。
5. 禍を轉じて福とするとは何の謂なりや。
6. 學博しとも必ずしも徳高きとは限らず。
7. 今なれば旅行すも不自由の思ひはするまじ。
8. 頻りに呼鈴を鳴すとも更に返事はなかりけり。
9. 人を遣りて見せしめきに果して火災の起れるなり。
10. 實戦に臨むでは彈丸一發たるとも仇にしまじと心えべし。

第十章 第三類の助詞の用法

第三類の助詞は種々の品詞の下に附くからその用法も亦雑多である。

- (一) 人は去り、我は留まる。 旅行すること(口)は宜し。
 - 彼には與へず。 山の高き(口)は見ず。
 - (二) 楽しくは思はず。 斯くまではあらざりき。
 - 君よりは高し。 京へは行かず。
 - (三) 風荒々しう吹きたるは。 吾妻はや。
- はは普通他と區別する意味を表し、例(一)の如く體言又は用言の連體形に、例(二)の如く副詞や他の助詞等に接續する。なほ例(三)の如く感歎の意味を表す時もある。はが客語に

は

附くを、打消のすに續く時は多くばになる。

- (一) 人も去り、我も去る。 善き(事)も悪き(事)もあり。早くもなければ遅くもなし。
 - (二) 誰が袖ふれし宿の梅ぞも。 忘れかねつも。
 - (三) 花なき里も花ぞ散りける。 見ることも叶はず。
- もの例(一)は事物を重ねる意、例(二)は感歎の意、例(三)はさへと同じ意を表す。もはまた現代文では第二類の助詞に轉用せられることもある。
- 彼處には犬が五疋も居る。(口) 五年間も勤めてゐる。(口)
- 口語では右の如く分量を示すことがある。
- (一) 我が子にてをあれよ。 見つつを行かむ。
 - (二) 苦をあらみ。 瀬を早み。

も

を

ぞ・なむ

(三) 名にし負はば。

旅をしぞ思ふ。

例(一)のをと、例(三)のことは共に上にある語を強めて特に注意を惹かしめ、例(二)のをは唯感歎の意を表すだけである。

(一) 花ぞ美しき。

日月は早くぞ過ぎし。

(二) 月なむ出づる。

遇はでなむ往にける。

(三) 汝は何を考ふるぞ。

かくあるは世の常ぞ。

ぞは文の中間(例二)又は終(例三)になむは文の中間(例二)に在つて、その上の語句の意味を強めて言ひ表すものである。この兩語が文の中間に在る時はその下を連體形で結ぶ定めである。又それが用言に續く時はその連體形を受ける。

花こそ美しけれ。

早くこそ行きしか。

白きこそよからめ。

遇はでこそ往にけれ。

こそ

こそはぞ・なむよりも一層その上の語句を強めるもので、この場合にはその下を已然形で結ぶ定めである。用言に續く時はその連體形を受ける。

(一) さる事有りや無しや。

來し方を思ひ出づや。(疑問)

(二) めづらしや、景清。

潔く死ねや、者ども。

ありがたの世や。

行きけるぞや。(感歎)

(三) かくと思ひがけきや。

根さへ枯れめや。(反語)

やが文の終の用言に附いて疑問の意を表す時はその終止形(現代文では連體形も許される)感歎の時は終止又は命令形、反語の時は終止又は已然形を受ける。

(四) 夜や暗き、道や迷へる。

白きや良き。

彼も斯くや思ひし。

徒に日をや過すへき。

や

やが右の如く文の中間に在つてそれらの意を表す時は、その下を連體形で結び、又用言の下に續く時はその連體形を受けらる。

(五) 別れは惜しくやはあらぬ。我れ鶯に劣らましやは。

(六) 皆人は花や蝶やと急ぐ頃。此處や彼處と尋ね行く。

例(五)の如く反語のやが感歎の意のはと結合してもその用法は全く同じである。例(六)のやは口語のヤラに相當して語句を重ねる意を表す。

誰やら判らない。(口)

何うやら勝てさうだ。(口)

口語のヤラは又右の如く不定推量等の意に用ゐられる。

(一) 花かあらぬか浪の寄するか。

(二) 如何にすべきか。誰人なるか。

か

係
結

(三) 玉にも貫ける春の柳か。空蟬の世にも似たるか。

(四) かくてのみやむべきものか。さのみ歎くべきかは。

(五) 誰れかは春を恨み果てたる。いづくにか行きし。

かの例(一)(二)は疑問、例(三)は感歎、例(四)は反語の意である。反語には多く感歎の意のはを伴ふ。か又はかはが用言に附けばその連體形を受け、又それが例(五)の如く文の中間に來れば、その下を連體形で結ぶ定めである。なほ例(二)の如何に、誰等の如き疑の語が上にあれば、下にはかを用ゐる定めであるが、現代文ではその代りにやを用ゐても宜しい。文章は普通用言の終止形で結ぶが、前述の如くぞなむやかの助詞がその上にある時はその連體形、こその助詞がある時はその已然形で結ぶ定めである。これを係結といひ、そ

これらの助詞を係詞、その用言を結詞といふ。また普通の終止形で結ぶものを第一終止法、連體形で結ぶものを第二終止法、已然形で結ぶものを第三終止法といふ。但しこの結詞が次の如くその下に第二類の助詞を伴ふ時と口語文とはこの係結法に據らない。

かの童ぞよく道を知りたれ。ば呼びて問はれよ。

友にあふこそ嬉しき。今は昔を語る友やなからむ。

次の例(一)のすらは一事を擧げて他を推定させる意で、口語のデモに相當し、例(二)のさへは或る重い事柄の上に更に添ひ加はる意で、口語のマデモに相當し、例(三)のだには軽いものを擧げて他の重いものを言外に思はしめる意で、口語のセメテ、デモ又はサへに相當する。

すら・さへ・
だに

のみ
ばかり

よ・な
かし

- (一) 聖人すら猶かくの如し。 鳥すら通はず。
- (二) 雪降るに風さへ吹きたり。 貧さへ加はりぬ。
- (三) 水だにあらば、よかりしを。 手にだに取らず。
- 口語ではすらもだにも消滅してサへが一般に用ゐられる。
- (一) 來し方のみ思ひ續けらる。 我のみ之を知る。
- (二) 我ればかり行くを許せよ。 皆人歎くばかりなり。
- 右ののみばかりは略、同じ意で、或る一つのものを特に限つて言ふ時に用ゐる。ばかりが用言に續く時は、古くはその終止形を受けたが後世ではのみと同様その連體形を受ける。口語ではこの意味にダケ、バカリ、バツカリ等を用ゐる。
- (一) ひとりある夜の心細さよ。 人の知らぬよ。
- (二) 花の色は移りにけりな。 汝は臆したりな。

な・なゝそ

(三) さるけはひもありきかし。 富をばふやせかし。
右のよなかしは共に感歎の意を表すが、かしは多く念を推して言ふ時に用ゐる。よなは又呼びかける意にも用ゐる。これらの助詞が用言に續く時は、よはその連體形、なはその終止形、かしはその終止又は命令形を受ける。

- (一) すまじきことをすな。 其處に居るな。
- (二) 聲高にな笑ひそ。 深くな恨みそ。
- (三) 早くな來そ。 悪口なせそ。

右の例(一)のなは動詞の終止形(但し良變は連體形)に附いてその動作を禁止し、例(二)のなゝそは動詞の連用形をその間に挿んでその動作を禁止する意を表す。但しなゝそが加變・佐變の動詞をその中間に挿む時は、例(三)の如くその將

然形を用ゐる。口語ではナだけを用ゐる。

練習

一、次の文中の助詞を分類してその用法を説明せよ。

1. 青柳の糸縊りかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける。
2. 鬼すらも都の中と簑笠を脱ぎてや今宵人に見ゆらむ。
3. 翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる。
4. 春雨に匂へる色も飽かなくに香きへなつかし山吹の花。
5. 荒く吹く風は如何にと宮城野の小萩が上を人の問へかし。
6. 春や疾き花や遅きと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな。
7. 雪とのみ降るだにあるを櫻花如何に散れとか風の吹くらむ。

二、次の文中の誤を正し且つその理由を述べよ。

1. 家の亂るは主婦の罪なり。 2. 飯さへあらば宜しからむ。
3. 帝は大佛を鑄らしめ給へき。 4. 人來ると見きは案山子なり。

5. 敵兵はここにも来きといふ。
6. 丁寧に教えて改めさしたり。
7. 試験を受くも及第するまじ。
8. 今は彼の資財も盡くるらし。
9. 明日は雨が降るでしょう。(口)
10. 早く片付けてしまおうか。(口)
11. 明日出席し得るとも得ぬとも明言し難し。
12. かくの如く嘲らるも君はなほ恬然なるや。
13. かれが公にしし學説は信するべき理由あり。
14. この夜雨降り蚊すら多くして人々いも寝ず。
15. 彼は熱心に研究ししかば好結果を漸く顯れり。
16. 村民一致して先生の職に復されんことを請へり。
17. さる例の先にありしやを断じて穿鑿せらるるな。
18. 夜の暗きに雨だに降りていとど歩みわづらひたり。
19. 君はこの木を手づから植ゆるや又は誰に植えしむか。
20. 散りぬとも香をさへ残せ梅の花こひしき時の思ひ出にせむ。

三、次の文に誤あらば之を正し且つその理由を述べよ。

1. 行きて見たき心地なむせらる。
2. この兒利根こそ生れつきたらむ。
3. 今日先生の出しし問題ぞ甚だ解し易かりし。
4. 世にうとむじらるることの苦しふこそ存じ候。
5. 彼は例の病氣おこりてやおくれたるなるべし。
6. 人々皆とやせん、かくやすべしと案じわづらう。
7. 人誰かその身の幸福を希はざるものなからんや。
8. 今こそおちぶれたれども彼も昔は一城の主なりし。
9. 天氣は決して心配なくとも道路はさこそ悪しからむ。
10. この圖こそ某の名工の寫せしものと言ひ傳へたりし。
11. 勝算こそ十分ならずとも決して相手を恐れまじけれ。
12. 春雨の降りそめきより青柳の糸の緑ぞ色まさりけり。
13. 花の色は霞にこめて見せずとも香をさへぬすめ春の山風。

14. みよし野の大川のへの古柳かげこそ見えす春めきにけれ。
15. 神へ參るこそ本意なりと思ひて山までは見すとぞ云ひけれ。

四、次の文を各品詞に分ち、助動詞・助詞は其意味を云へ。

1. 山里の庭より外の道もがな花散りぬやと人もこそ問へ。
2. 飽かなくに散りにし花は色々に残りにつけりな君が袂に。
3. やよや待て山時鳥言づてむ我れ世の中に住みわびぬとよ。
4. 春雨はいたくな降りそ櫻花まだ見ぬ人に散らまくも惜し。
5. 秋萩の咲散る野邊の夕露に濡れつつ來ませ夜は更けぬとも。
6. 昨日こそ早苗取りしかいつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く。
7. 秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。
8. 今更に雪降らめやもかげろふのもゆる春日と成りにしものを。
9. 獨りのみながめて散りぬ梅の花知るばかりなる人は訪ひ來で。
10. 我が宿のものなりながら櫻花散るをばえこそとどめざりけれ。

第三編 文章論

第一章 文の成分

文章を組織する九品詞を大別すると、凡そ觀念語と形式語との二つになる。而してその形式語は常に次の如くその上にある觀念語に附屬してゐる。

予は兄に文法を教へらる。 海の面は鏡の如し。

右の如く觀念語とその下にあつてそれに附屬する形式語とを合したものを連語といふ。文章論では多くこの連語を一單位としてその相互の關係を取扱ふのである。

總て文章は少くとも主語と述語との二要素を具へ、更にその述語の性質によつては客語・補語を必要とすることは既

連語

文の主成分

に述べた所である。この主語・述語・客語及び補語は皆文章を組織する主要な成分であるから、之を文の主成分といふ。就中主語・客語・補語は體言又は體言に助詞の附いた連語から成り、述語は動詞・形容詞又は動詞・形容詞・體言に助動詞の附いた連語から成つてゐる。

日本は氣候温和なり。

彼は顔色悪し。

文主

右の日本・彼等の如く、一つの文章をその述語とする主語を特に文主(又は總主語)といふ。

(一) 我が軍優勢なる敵を破る。

秋の月は澄める玉に似たり。

父は來る四月三日に出發する。(口)

(二) 昨日は甚だ寒かりき。

修飾語

彼は韋駄天の如く走る。

僕も思はず知らず落涙した。(口)

右の傍線を施した單語又は連語の如く、専ら文の主成分に附屬してその意味を修飾するものを修飾語といふ。而して例(一)の如く體言又は名詞から轉來した副詞を修飾するものを形容詞的修飾語(又略して形修飾語)といひ、例(二)の如くその他のものを修飾するものを副詞的修飾語(又略して副修語)といふ。前者は重に主語・客語・補語を修飾して、用言の連體形又は體言に第一類の助詞がのの附いた連語から成り、後者は重に述語を修飾して、多く副詞から成つてゐる。

(一) 公園を散歩す。

大阪に滞在す。

(場所)

(二) 病氣に悩む。

花見に行く。

(原因)

補語の意味

(三) 兄は弟と遊ぶ。 (相手)
 予は彼と交る。 (相手)
 (四) 飯粒して鯛釣る。 (用具)
 二人して帯を結ぶ。 (用具)
 第一類の助詞のをに^ごしてが體言に附いて右の如き意味を表す連語と、同類の助詞のへより^りから^まで^にても^てが體言に附いて出來た連語とは、廣義の補語であつて、その實いづれも皆副詞的修飾語である。隨てこれから文章論で取扱ふ補語は、第一類の助詞のに^ごしてが體言に附いて次の如き意味を表す連語である。

- (一) 水が氷になる。 (結果)
 弟が嗣子となる。
- (二) 落花雪に似たり。 (標準)
 これを天佑といふ。
- (三) 弟に家産を譲る。 (客語二)
 生徒に地圖を示す。
- (四) 犬が子供に打たる。 (主動作)
 彼(を)して買はしむ。

主部

敘述語

獨立語

文の成分は主成分と副成分たる修飾語とである。而して主語・文主・客語・補語・述語にそれ^らの修飾語を加へて**主部**・**文主部**・**客部**・**補部**・**述部**といひ、また客部以下を主部に對して**敘述部**と總稱することもある。

- (一) おい、田中君、君は行かないか。(口)
- (二) やあ、^く者ども出合へ出合へ。

右のおい・田中君・やあ^く等の如き呼掛けの語や感動詞は文の各成分から全く獨立してゐるものであるから、之を獨立語といふ。

練習

次の文章を各成分に分解せよ。

1. 庭は一夜に黄金となりぬ。

2. 子は長閑なる春の日を好む。
3. 燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らむ。
4. 彼は甚だ輕卒な行爲をした。(口)
5. 梅も櫻も桃も一時に咲き出づ。
6. 正成は智仁勇を兼備せる大將なりき。
7. 太郎は愛する犬にボチと名をつけた。(口)
8. いかにも母御前、父はいづくにおはしますぞ。
9. 僕は昨日の午後、弟と上野公園を散歩した。(口)
10. 新設の學校は來學年から生徒を募集するさうだ。(口)
11. 多くの人がいかにも苦しうに山を登つてゐる。(口)
12. 舶來の品は大抵その價が和製のものよりも高い。(口)
13. 明治二十三年十月三十日、明治天皇は忝くも我等國民に教育勅語を下し賜ひけり。

第二章 文の成分の位置と省略

(一) 春雨の音いと静なり。
 (二) 我が軍大いに敵を破る。
 (三) 父は巨萬の財産をその子に譲る。
 (四) 頼朝は弟の範頼義經をして平家を西海に討たしむ。

文の各成分の位置は、右の例の如く、主語が首位に、述語が末位に、客語・補語はその中間に在るのが普通であるから、之を正序法といふ。而して修飾語は常にその修飾する語の上

- に在る。
- (一) 美なるかな、山河の固め。
 (二) 花の盛りを人の訪へかし。

正序法

倒序法

- (三) 移ろふ色に人ならひけり。
- (四) 雲のいづこに月宿るらむ。

右の如く文の語調を整へ、或は語勢を強める爲に、特に文の成分の位置を變ずることがある。之を倒序法といふ。

- (一) (人々)ここに馬を繋ぐべからず。
- (二) 千里の道も一步より(始まる)。
- (三) 人は(我)を(譏)るとも我は(人)を(恨)みじ。
- (四) 我が弟も(學校長)に(入學)を許されたり。

右の如く文章の意味が明確である場合に、文を簡潔にし、語勢を強くする爲に、文中の或る成分を省略することがある。之を省略法といふ。

省略法

練習

倒序法又は省略法を用ゐた次の文章を正序法に改めよ。

1. 祈れ、諸人聖壽の無窮を。
2. 門前で待つからすぐ來い。(口)
3. 酒は飲まないが水は飲む。(口)
4. 我聞く、大阪は鼠疫流行すと。
5. かれは未恐しき少年にこそ。
6. 知己なくば人生は荒野のみ。
7. もうあの人も財産を譲つた。(口)
8. やよ正行、忘れたるか、父の遺訓を。
9. もうお歸りですか。どうぞ御機嫌よう。(口)
10. そんな事を誰にあなたはお聞きになりました。(口)
11. 思ひきや別れし秋に廻りあひて、又も此世の月を見むとは。

- 12. おい君、見に行かないか。何を。野球を。何處に。鳴尾に。(口)
- 13. さて主上はいづこにおはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。

第三章 節と文の構造上の種類

- (一) 花の散るは、雪の降るに似たり。
 - (二) 雪少き地方にも、寒さの厳しき處あり。
 - (三) 雪は野山を埋むとも、老いたる馬ぞ道は知る。
 - (四) 吉野山は花に宜しく、立田川は紅葉に宜し。
- 右の傍線を施した部分の如く、文がその獨立を失つて他の文の一部分となつたものを節といふ。
- 例(一)の花の散るは主語、雪の降るは補語の用をなしてゐる。

名詞節

かくの如く名詞の用をなす節を名詞節といふ。

君子は人の己を知らざるを憂へず。 (客語の節)

品質の甚だ良きは價格もまた高し。 (文主の節)

例(二)の雪少き寒さの厳しき等の如く形容詞の用をなす節を形容詞節といふ。

雨の降る夜こそ寂しけれ。

ここに生徒の山水を畫ける卷物あり。

例(三)の節の如く、第二類の助詞によつて接続した他の文の述語に對して、副詞の用をなす節を副詞節といふ。

水清ければ大魚棲まず。

彼は徳高けれど學識に乏し。

例(四)の二つの節の如く、文中の各節が互に相對立して主従

獨立節

の關係なく、全く同等の價値を有する節をそれと獨立節といふ。

兄は音樂を好み、弟は繪畫を嗜めり。

霞は空にたなびき、鶯は枝にさへづる。

節には右の如き種類があるから、文も亦その構造の上から次の如く三種となる。

(一) 父が財産を長子に譲りたり。

我が兄弟は一人の叔母に幼少より育てらる。

獸を狩る獵師は獸と同じやうな服裝をしてゐる。(口)

右の如く節を含まないで、主語と述語との關係が唯一回だけ成立する文を單文といふ。文主の述語は一種の節であるが、その節は文主に對して單に述語の用をなすだけであ

單文

るから、文主とその述語たる節とから成る文は矢張この單文の中に加へる。

(二) 雪の降るは暖國にては珍し。

子供等は父の歸る日を待つ。

風は吹けども、雨は少しも降らず。

右の如く名詞節・形容詞節或は副詞節を含み、主語と述語との關係が二回以上成立する文を複文といふ。

(三) 花笑ひ、鳥歌ふ。

豹は死して皮を留め、人は死して名を留む

右の如く二つ以上の獨立節から成る文を重文といふ。複文と重文とは互に他の文をその中に含むことがある。

重文

複文

練習

次の文とその中に含まれる節との種類を答へよ。

1. 私は日が出ると出發した。(口)
2. 日は暮れたるに、宿るべき家なし。
3. 石が雨の降るやうに飛んで來た。(口)
4. 顔の色が白いものは百難を隠す。(口)
5. 花咲く春は楽しく、月澄む秋は哀なり。
6. 日暮れ風加はれども、暑氣更に減せず。
7. 日出づれば空晴れ、日没すれば空曇る。
8. 我と兄とは同時に登校し、同時に歸宅す。
9. 山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心我があらめやも。
10. 散らねどもかねてぞ惜しき、紅葉ばは今は限の色と見つれば。

第四章 文の性質上の種類

文は又その性質の上から次の如く四種に分類せられる。

(一) 恩を仇にて報いらる。 歲月は流るるがごとし。

その終る所を知らず。 空うららかに晴れたり。

右の如く事實をありのままに敘述する文を**平敘文**(又は**敘述文**)といふ。この文體の述語は用言の終止形で結ぶのが普通で、**ぞ**・**なむ**・**こそ**の係詞がある時はそれに應じた結詞が來る。この種の文には肯定・否定・假定・推量・希望等を表すものがあつて、その應用の範圍が最も廣い。

(二) 榮枯は夢か幻か。 夜や暗き、道や惑へる。
出生地はいづくぞ。 雲の何處に月宿るらむ。

平敘文

疑問文

右の如く疑問の意を表す文を**疑問文**といふ。疑問文には多く助詞のや・か・ぞを添へるが、上に**何處・何故・なに・誰**の如き疑の語がある時はそれらの助詞を省くことがある。なほ反語の文も、その意味は断定であるが、その形が疑問であるから、矢張疑問文の中に加へる。

(三)

朝は早く起き給へ。 兄弟は仲睦じかれ。

油断することなかれ。 主なしとて春な忘れそ。

命令文

右の如く命令の意を表す文を**命令文**といふ。命令文の述語は多く用言の命令形で結び、稀に助動詞のべし・べからず、助詞のな・なゝ・そを用ゐる。なほ命令文の主語は常に第二人称であるから大抵省かれる。

(四)

汝と今や別るなり。

花の色は移りにけりな。

感動文

右の如く感動の意を表す文を**感動文**(又は**感歎文**)といふ。感動文は感動詞を含むか、又はその述語に詠歎の助動詞・感動の意を表す助詞を添へる。なほ感動文には省略法や倒序法を用ゐることが多い。

嗚呼、誠忠なるかな。

あはれ、友逝きぬるかも。

練習

次の文を各成分に分解し、且つそれが構造上及び性質上如何なる種類の文に屬するかを説明せよ。

- 1. 七たび尋ねて人を疑へ。
- 2. 雨降つて地固まる。
- 3. 能ある鷹は爪をかくす。
- 4. やあ、よくやつて来たね。(口)
- 5. 月日は人を待つものは。
- 6. 日本人は忠義の心が深い。(口)
- 7. 明日午前六時出頭すべし。
- 8. 月明に、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ。
- 9. また來む春のなからんやは。
- 10. 波の起るは風の吹くによる。

- 11. 堤上の樹木を折るべからず。
- 12. 衣は脛に至り、袖は腕に至る。
- 13. いかでできることのあるべき。
- 14. 物思ふ我れに、聲な聞かせそ。
- 15. あはれ、今年の秋も往ぬめり。
- 16. 不幸にも彼は病にて天せり。
- 17. 秋風に初雁がねぞ聞ゆなる。
- 18. 父子共に吉野朝の忠臣たり。
- 19. 人を誹れば己も人に誹らる。
- 20. 花咲き鳥鳴く春既に來りぬ。
- 21. 我が待たぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず。
- 22. あはれてふ言をあまたにやらじとや春に後れて獨り咲くらむ。
- 23. 雪降りて年の暮れぬる時にこそ終にもみぢぬ松も見えけれ。
- 24. 私は幼い時父にも母にも兄弟にも死に別れました。(口)
- 25. 身は千里を隔てたりとも心はなか通せざらむ。
- 26. 都人さこそ待つとも時鳥同じ深山の友な忘れそ。
- 27. 父は三年前に死に、母もまた去年の秋逝きけり。
- 28. 彼は慈愛深き人なれば彼を慕はぬものはなし。

- 29. ああ誰が造りなしけむ、この自然の美しさよ。
- 30. 願はくは花のもとにて死なむかな。

新撰國文典終

附録(一) 正誤問題集

1. 身を全ふす。
2. 雨が降らふ。
3. 天高く馬肥ふ。
4. 旅行をせやう。
5. 心を正しふす。
6. 試験を受けやう。
7. 人に合す顔なし。
8. いそげばまわれ。
9. 甘むじて事をなす。
10. 彼も中々強そうだ。
11. 偽を教ゆるなかれ。
12. 敬服の至りに堪えず。

13. 人に任す場合あり。
14. 朝早く起くるべし。
15. そんな事はせまい。
16. 猥りに出入を禁ず。
17. 車へ乗りて行かむ。
18. 人を頼むで事を誤る。
19. 彼はついに成功した。
20. 業を卒えて後にせむ。
21. 之に甘むするを得ず。
22. 歌を歌いて心を慰む。
23. 神の恵を受くるべし。
24. 敵は遠くは落ちまじ。

25. 立錐の餘地さへなし。
26. かの友は既に死にぬ。
27. 花咲かば告ぐるべし。
28. 酒を飲むで歌をうたう。
29. 銅像を鑄りて徳を頌す。
30. 遠大の志を立つるべし。
31. 彼は何處へも行かまい。
32. 妨げなせば容赦はせじ。
33. 功を急ぎて過ちするな。
34. 明後日開會の豫定なり。
35. 死むでから名が揚つた。
36. もうすぐ済んでしもう。
37. 美しき衣服を着せしむ。
38. 身を修まりて家を整ふ。

39. 書生に門前の掃除をさす。
40. 絶へて面會せしことなし。
41. この人々を乗すこと難し。
42. 油断するまじきことなり。
43. 五に三を乗じば十五を得る。
44. 濱の眞砂の数は盡くるまじ。
45. 首尾よくその任務を終へり。
46. 雨がやむだら散歩に行こふ。
47. 世人に譏らるが心憂しのみ。
48. この溝の中に塵を捨つるな。
49. 撓ます勉まば山をも平ぐべし。
50. もはや期日を延ぶこと能わす。
51. 昨日歸宅するは午後三時なり。
52. 然らざれば人必ず我を嗤はむ。

- 53. 人才學なくば身を立て能はず。
- 54. 憤慨すべし、憂慮するべからず。
- 55. 人に笑はれまじとて努力しぬ。
- 56. 棄てる神あれば助ける神あり。
- 57. 富士山巔の雪は夏も絶えまじ。
- 58. 願のかなうようにつとめやう。
- 59. 命を捨てても國恩に報ひざらむや。
- 60. 花の見えぬは霞のこれを隔つなり。
- 61. さう言う事はないであろふと思ふ。
- 62. 一滴にても服すときは直に死さむ。

- 63. 今日日曜なれば明日は月曜ならむ。
- 64. 齡長ける人は年少の者を勞るべし。
- 65. 林檎食ふて牡丹の前に死なむかな。
- 66. 敵を探せしに果して數百人ありき。
- 67. 富士山と新高山といづれが高きや。
- 68. 友が訪ふともな長居せたまひそ。
- 69. 神州の兵威をして宇内に輝すに至る。

- 70. 邦國をして隆盛の域に進めしむべし。
- 71. 好むで極言せば死地に陥ることあり。
- 72. 精神一たび到れば何事か成らざらん。
- 73. これより内に車乗り入るるべからず。
- 74. 自由に運動することを得せしめらる。
- 75. 假令死ぬるともいかで敵に降るべきや。
- 76. 彼は屢罰せらるとも毫も改める色なし。

- 77. 仁徳天皇はいと慈仁におはしし君なり。
- 78. 一座感涙を流さぬものこそなかりける。
- 79. 長く交はりてこそ人の性質は知らるる。
- 80. 我いふ事を用いずば後に悔ふとも及ばじ。
- 81. 去らんと欲すれば去れ、我必ずしも留めず。
- 82. これ國民の忘るるべからざる記念日なり。
- 83. この陣地さへ落せば他は憂うるに足らず。

- 84. 負りたる傷より流る血しほ拭いも敢えず。
- 85. このことは如何に處理して可なるべきや。
- 86. 僅かの金銭にても漸次積みて巨萬に上るべし。
- 87. 私欲を制すことは難く、放逸に流ることは易し。
- 88. 通券所持の人々は東の入口より入場さるべし。
- 89. この坊ちやんは大層よく肥へていらつしやる。
- 90. 一足早く行きしなれば見らるるべかりしものを。

- 91. 演説今や終へたれば拍手堂を動かすばかりなり。
- 92. たとひ人には知られざるも心に恥じざるべきや。
- 93. 花を咲かしむるも雨、散らせしむるも亦雨ならずや。
- 94. 彼老ひたるとも戦場にのぞめば必ず壯者を凌がむ。
- 95. 露の命と思へどもなほ惜しまるが世の常なりけれ。
- 96. 父の遺訓を望んで謹むで之にことふる所あらんとす。
- 97. 御手数誠に恐入候も何分の御相談下されまじく候や。

- 98. 田を耕す男、苗を植ゑる女、時節は今ぞ農繁の時期なり。
- 99. 心ここにあらざれば視るとも見えず、聴けども聞えじ。
- 100. 貧家に生まれたるこそ幸福なると古聖もいはれたれ。
- 101. 小人は身を利すに専らにして人をそこなふるを顧みず。
- 102. 夜は明けたるが如けれど人の起き出でたる様子ぞなし。
- 103. 善を爲せば人に喜ばるべく、不善を爲せば人に悪まるべし。
- 104. 今朝こそ早く起きたれど、目的の如く勉強し能わざりしか。

- 105. 我が商店にては性質敏慧にして事務に通曉の者を要する。
- 106. 風さへ吹かねば花も散るまじを昨夜の暴風ぞ怨めしけれ。
- 107. 我が兵士よ、たとひ殺戮さるまでも誓ふて敵に降伏するな。
- 108. 宅を構ふにも村中相戒めて廣き造作をば堅く禁ずるといふ。
- 109. 此の度の試験には我れこそ優等なりと思へども如何あらめ。
- 110. 既に中學の業を卒へるが故に將に進むで高等學校に入れり。

附録(二) 文法上許容ニ關スル事項

一、居リ「恨ム」死ヌヲ四段活用ノ動詞トシテ用井ルモ妨ナシ。

二、「シク・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用井ル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用井ルモ妨ナシ。

例 火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用井ルモ妨ナシ。

五、「セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 手習サス。周旋サス。賣買サス。

六、「セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用井ル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七、得シム「トイフベキ場合」ニ「得セシム」ト用井ルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシガバ」ナドトス

ルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシム止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

「〇」疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容

詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二、てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三、てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助

動詞受身ノ助動詞及時ノ助動

詞ノ連體言ニ連續スル習慣アル

モノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘゲルトゾ。

三、語句ヲ列舉スル場合ニ用井ルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキモ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解

生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀

ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀

ムベシ。

一四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用井ルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリト

モ)議場ニ入ルコトヲ許サ

ズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ

(タレドモ)準備ハ未ダ成ラ

ズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例、

請願書ハ會議ニ付スルモ

(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレトモ)應募

者ハ多カルベシ。

「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」

ヲ用井ル習慣アル場合ハ之ニ

從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

(明治三十八年十二月二日
文部省告示第五百五十八號)

附録(終)

加變	佐變
(來)	(爲)
こ	せ
き	し
く	す
くる	する
くれ	すれ
こよ	せよ
加變	佐變
(來)	(爲)
コ	セ
キ	シ
クル	スル
クル	スル
クレ	スレ
コイ	シロ

加變	佐變
(來)	(爲)
こ	せ
き	し
く	す
くる	する
くれ	すれ
こよ	せよ
加變	佐變
(來)	(爲)
コ	セ
キ	シ
クル	スル
クル	スル
クレ	スレ
コイ	シロ

動詞の活用表

文	語根										活用ノ種類	活用ノ種類
	種	四	奈	良	上二	上	下二	下	加	佐		
語	類	段	變	變	二	一	段	段	變	變	類	形
口	書	死	有	起	(見)	受	(蹴)	(來)	(爲)	書	終止	
文	書	死	有	起	(見)	受	(蹴)	(來)	(爲)	書	終止	
語	か	な	ら	き	み	け	け	こ	せ	か	將然	
活	き	に	り	き	み	け	け	き	し	き	連用	
用	く	ぬ	り	く	みる	く	ける	く	す	く	終止	
形	く	ぬる	る	くる	みる	くる	ける	くる	する	く	連體	
	け	ぬれ	れ	くれ	みれ	くれ	けれ	くれ	すれ	け	已然	
	け	ね	れ	きよ	みよ	けよ	けよ	こよ	せよ	け	命令	
口	書	死	有	起	(見)	受	(蹴)	(來)	(爲)	書	終止	
語	カ	ナ	ラ	キ	ミ	ケ	ケ	コ	セ	カ	將然	
活	キ	ニ	リ	キ	ミ	ケ	ケ	キ	シ	キ	連用	
用	ク	ヌ	ル	キル	ミル	ケル	ケル	クル	スル	ク	終止	
形	ク	ヌ	ル	キル	ミル	ケル	ケル	クル	スル	ク	連體	
	ケ	ネ	レ	キレ	ミレ	ケレ	ケレ	クレ	スレ	ケ	已然	
	ケ	ネ	レ	キキ	ミミ	ケケ	ケケ	ココ	セシ	ケ	命令	

動詞の活用と行との關係表

格 正	活用行		
	下二段	上二段	四段
得			
受く	起く	書く	あ
馳す		押す	か
隔つ	落つ	待つ	さ
尋ぬ			た
與ふ	強ふ	言ふ	な
責む	恨む	歩む	は
越ゆ	報悔老 めめめ		ま
流る	懲る	取る	や
植る			ら
			わ

動詞の活用表

活用ノ種類		語根		活用ノ種類		語根		活用ノ種類		語根	
文	口	文	口	文	口	文	口	文	口	文	口
種	類	種	類	種	類	種	類	種	類	種	類
四	段	四	段	四	段	四	段	四	段	四	段
奈	變	奈	變	奈	變	奈	變	奈	變	奈	變
良	變	良	變	良	變	良	變	良	變	良	變
上	二	上	二	上	二	上	二	上	二	上	二
上	一	上	一	上	一	上	一	上	一	上	一
下	二	下	二	下	二	下	二	下	二	下	二
下	一	下	一	下	一	下	一	下	一	下	一
加	變	加	變	加	變	加	變	加	變	加	變
佐	變	佐	變	佐	變	佐	變	佐	變	佐	變
書	カ	書	カ	書	カ	書	カ	書	カ	書	カ
死	ナ	死	ナ	死	ナ	死	ナ	死	ナ	死	ナ
有	ラ	有	ラ	有	ラ	有	ラ	有	ラ	有	ラ
起	キ	起	キ	起	キ	起	キ	起	キ	起	キ
(見)	ミ	(見)	ミ	(見)	ミ	(見)	ミ	(見)	ミ	(見)	ミ
受	ケ	受	ケ	受	ケ	受	ケ	受	ケ	受	ケ
(蹴)	ケ	(蹴)	ケ	(蹴)	ケ	(蹴)	ケ	(蹴)	ケ	(蹴)	ケ
(來)	コ	(來)	コ	(來)	コ	(來)	コ	(來)	コ	(來)	コ
(爲)	セ	(爲)	セ	(爲)	セ	(爲)	セ	(爲)	セ	(爲)	セ
終止	キ	終止	キ	終止	キ	終止	キ	終止	キ	終止	キ
連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク
已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ
命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ
終止	キ	終止	キ	終止	キ	終止	キ	終止	キ	終止	キ
連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク
已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ
命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ

動詞の活用と行との關係表

變格活用	正格活用					活用行
	下二段	上二段	下二段	上二段	四段	
來	蹴る	着る	受く	起く	書く	あ
おはすす			馳す		押す	か
			隔つ	落つ	待つ	さ
往死ぬぬ		煮似るる	尋ぬ			た
		難干るる	與ふ	強ふ	言ふ	な
		見る	責む	恨む	歩む	は
		歸射るる	越ゆ	報悔老ゆゆゆ		ま
待居有りリリ			流る	懲る	取る	や
		率用居るるる	掘削掘りりり			ら
						わ

(注意、太字は限られた動詞)

形容詞の活用表

活用ノ種類		語根		活用ノ種類		語根	
文	口	文	口	文	口	文	口
種	類	種	類	種	類	種	類
久	活	久	活	久	活	久	活
美	高	美	高	美	高	美	高
終止	ク	終止	ク	終止	ク	終止	ク
連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク
已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ
命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ
終止	ク	終止	ク	終止	ク	終止	ク
連用	ク	連用	ク	連用	ク	連用	ク
已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ	已然	ケ
命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ	命令	ケ

の 詞 動 助 の 語 文

の 助 動 詞 類		時										法										希望			相		
		現在		完了		過去		未來		肯定		否定		過去		希望		受相			能相		勢相		役相		
語	り	たり	つ	ぬ	き	けり	む	む	む	べし	まし	じ	まじ	けむ	なむ	ばや	しが	もが	たし	まほし	る	らる	らる	す	さす	しむ	
將然	ら	たら	て	な	せ	けら	〇	〇	〇	べく	ませ	〇	まじく	〇	〇	〇	〇	〇	たく	まほしく	れ	られ	られ	せ	させ	しめ	
活用	り	たり	て	に	〇	けり	〇	〇	〇	べく	〇	〇	まじく	〇	〇	〇	〇	〇	たく	まほしく	れ	られ	られ	せ	させ	しめ	
終止	り	たり	つ	ぬ	き	けり	む	む	む	べし	まし	じ	まじ	けむ	なむ	ばや	しが	もが	たし	まほし	る	らる	らる	す	さす	しむ	
連體	る	たる	つる	ぬる	し	ける	む	む	む	べき	まし	じ	まじき	けむ	〇	〇	〇	〇	たき	まほしき	る	らるる	らるる	する	さする	しむる	
已然	れ	たれ	つれ	ぬれ	しか	けれ	め	め	め	べけれ	ましか	じ	まじけれ	けめ	〇	〇	〇	〇	たけれ	まほしけれ	れ	られ	られ	すれ	さすれ	しむれ	
命令	れ	たれ	てよ	ね	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	たれよ	まほしよ	れよ	られよ	られよ	せよ	させよ	しめよ	
動詞との接續法	四段の已然形、 左變の將然形	各動詞の連用形	各動詞の連用形	各動詞の連用形	各動詞の連用形、 但加・左變は例外	各動詞の連用形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	各動詞の連用形	各動詞の連用形	各動詞の連用形	各動詞の將然形	各動詞の將然形	右以外の將然形	右以外の將然形	右以外の將然形	右以外の將然形	右以外の將然形

表用活ノ詞動助ノ語口

尊										相			希	法		時					ノ助 種動 類詞							
敬										役 相	勢 相	能 相		受 相	過 去	否 定	未 來	過 去	完 了	現 在								
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	ラ	レ	ラ	レ	タ	マ	ヨ	ウ	タ	タ	テ	テ	語						
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	ラ	レ	ラ	レ	タ	○	○	○	○	タ	タ	テ	テ	將					
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	ラ	レ	ラ	レ	タ	○	○	○	○	タ	タ	テ	テ	連					
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	ラ	レ	ラ	レ	タ	マ	ヨ	ウ	タ	タ	テ	テ	終						
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	ラ	レ	ラ	レ	タ	○	○	○	○	タ	タ	テ	テ	連					
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	ラ	レ	ラ	レ	タ	○	○	○	○	○	○	テ	テ	已					
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	○	○	ラ	レ	○	○	○	○	○	○	テ	テ	命						
下	遊	ナ	ナ	サ	ラ	セ	レ	サ	セ	○	○	ラ	レ	○	○	○	○	○	○	テ	テ	口						
各動詞ノ連用形又ハ佐變トナリ得ル名詞、但シ「ユル」ハソレトノ間ニ多ク助詞「ニ」ヲ挿										四段以外ノ將然形		四段ノ將然形		四段以外ノ將然形		四段ノ將然形		各動詞ノ連用形		各動詞ノ終止形		四段以外ノ將然形		四段ノ將然形		各動詞ノ連用形		トノ接續法

表用活ノ詞動助ノ語口

比況	詠歎	指定		打消		推量		謙遜		尊敬										相			希望	法		未來				
								第二種	第一種	役相		勢相	能相	受相	過去	否定														
										サ	セ																			
ヤウダ	ワイ	ダ	デス	デア	ナイ	ヌ(ン)	ラシイ	ダラウ	申ス	マス	下サル	遊バス	ナサル	ナル	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	サセル	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	タイ	マイ	ヨウ	
○	○	ダ	デ	デア	○	ズ	ラシク	○	申サ	マセ	下サラ	遊バサ	ナサラ	ナラ	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	サセ	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	タ	○	○	
○	○	ダ	デ	デア	ナ	ズ	ラシクウク	○	申シ	マシ	下サリ	遊バシ	ナサリ	ナリ	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	サセ	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	タ	○	○	
ヤウダ	ワイ	ダ	デス	デア	ナイ	ヌ(ン)	ラシイ	ダラウ	申ス	マス	下サル	遊バス	ナサル	ナル	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	サセル	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	タイ	マイ	ヨウ	
ヤウナ	○	○	○	デア	ナイ	ヌ(ン)	ラシイ	○	申ス	マスル	下サル	遊バス	ナサル	ナル	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	ナセル	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	タ	○	○	
○	○	○	○	デア	ナイケレ	ネ	ラシケレ	○	申セ	マスレ	下サレ	遊バセ	ナサレ	ナレ	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	サセ	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	タイケレ	○	○	
○	○	○	○	デア	○	○	○	○	申セ	(マシ)	下サレ	遊バセ	ナサレ	ナレ	サセラレ	ラレ	セラレ	レ	サセ	セ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	○	○	○	
各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形	各動詞ノ終止形

法續接の詞助と詞動

第三類	第二類	第一類	助詞/動詞
なこそ (加變佐變に限る)	では		將然形
なこそ	つつ		連用形
なかし (禁止)	と (は形容詞に) とも	と(補語)	終止形
なかし や(感歎) は(疑問) や(反語)	より	が・の・を・に・と・より・まで	連體形
や(係詞)・た(感動)	ども	が・に・を・	已然形
かし や(感歎)			命令形

大正十二年六月廿五日印
大正十二年七月一日發
大正十三年三月廿五日訂正再版印刷
大正十三年四月一日訂正再版發行

定價金四拾五錢
大正十三年度金八拾壹錢

著作
所權
有

新撰國文典

著者

福永勝盛

京都市上京區丸太町堀川西入

發行者

星野敬一

大坂市西區江戶堀南通三丁目一六

印刷者

廣村嘉一

發行所

大坂市西區江戶堀南通三丁目
電話土佐堀三八二七番

時習書院

廣村印刷所印

時習書院

終